

第5章 書き方の形式

その1 本文の書き方

1. p147 1. 行替え・行移し

文学書ですが、原本の会話文の挿入形式が以下の3種類あります。

- (1) 文が行の途中で終わって、次の行頭から会話文が始まる
- (2) 文の途中に会話文が続けて挿入されている
- (3) 文章が行末まであり、次の行の行頭から会話文が始まっている

(3) の場合、点訳して文章が途中で終わった時は、会話文は行替えするべきでしょうか、続けるべきでしょうか。原本で、会話文の挿入形式が定まっていないので、どちらを選ぶべきか迷っています。

なお、(1) も (3) も行頭のカギの位置は同じです。

【A】

会話文のカギカッコが原本の行頭から始まっている場合は、原本のカギカッコの位置で判断することになります。

(1) は、文が行の途中で終わって、行替えして第1カギを書くことになりますから、第1カギは3マス目から書きます。

(2) は、文の途中（行の途中）に会話文があるので、前をマスあけて、第1カギを書きます。

(3) は、前の行末の句点で、段落が変わるところであれば、次行3マス目から第1カギを書きますが、まだ同じ段落が続いている場合も考えられますので、原文のカギカッコの位置で判断します。

ご質問の原本では(1)と(3)のカギカッコの位置が同じということですので、行頭3マス目から第1カギを書くのがよいと思います。

なお、「てびき第3版指導者ハンドブック第5章編」p2～p4に原文のカギの位置と行替え・行移しの説明がありますので、用例4を参考にしてください

2. p148 2. 行末の扱い 【備考】

以前は、行頭に助詞「ワ」が来るとわかりにくいのでよくないとのことでしたが、今はどのような決まりがありますか？

例えば、外国語引用符の後に助詞「ワ」が続いたとき、「ワ」だけが次の行の行頭に

移ってもよいでしょうか？

【A】

第3版までは、「てびき」p148【備考】の、行末があきすぎる場合に行移しができる箇所、助詞も含めていましたので、「ワ」だけが行頭に来ることは避けるという注意がありましたが、第4版では行移しできる条件から助詞を省いていますので、この文言はなくなりました。

このように便宜的な行移し以外の、分かち書きや記号の前後のマスあけの規則に従って点訳した箇所では、「ワ」だけが次の行の行頭になっても、規則に準じて書きます。

外国語引用符を閉じた後、「ワ」だけが次の行の一マス目に来てもかまいません。

3. p148 2. 行末の扱い 【備考】

1500_オクユーロカラで1500_まで前行に入る場合、「てびき」の行末の扱いで「長い数字に続く長い単位の前」とありますが、どこまでを長いと判断すればよいでしょうか。ちなみに前行は12マスあいています。

【A】

「てびき」では行末があきすぎる場合、行移しできる箇所を、p148【備考】に示していますが、お勧めしているのは、(1) (2) と、(4)のISBNなどです。

ご質問の場合、「オク」は単位ではありませんし、「ユーロ」は長い単位とは言えませんので、途中で行移ししないで、すべてを次行に移した方がよいと思います。

どこから長い単位と言えるのかは、示すことができませんが、たとえば「平方センチメートル」「マイクロシーベルト」などカナで書く単位は10マス以上になる場合がありますので、そのために前の行が半分以上もあくような場合は、単位の前で行移しすることもやむを得ないかもしれません。

4. p149 3. 行あけ

行あけについて質問します。

分冊した箇所が原本で1行あけになっています。前の巻の最終行を1行あけるのか、次巻の1行目をあけるのか、どちらでしょうか。

【A】

前の巻の最終行の後も、次巻の1行目も、あけてもその意図は通じにくいと思います。

巻を代えたことで、流れの中断や場面の切り替えなどにつながっていますので、この1行あけに関しては無視せざるを得ないと思います。

5. p149 4. 挿入文の書き方

エッセイ本の中に、本文に関する著者の補足や注釈が、該当の語句が記載されている段落の直後に2～3文字分段が下がって書かれています。

注記があることを示す※や（注）は使われていません。

（例）

わが父は、親戚からも近所の人間からもだいぶ怖がられていた。理由はここでは語らない。

ここで語らない理由は、私でも原因がわからなかったから。もし読者の方で分かる人がいたら教えて下さい。

父については、過去の記事でも少し触れています。

三人の子らの顔には、如実に恐怖の表情が浮かんた。父の顔は特に変化もなく、三人の子らを一瞥し、無言で去っていった。

このような書き方がされている場合、

点字でも書き出し位置を下げてかくしかないのでしょうか。

本文に10箇所程度、挿入されている文の長さは1～4行程度です。

この他に（注）の印を用いた別の注記が一か所だけあります。

その注記説明は、欄外にあります。

他に思いついた方法は、

（1）枠線を用いて該当の段落の直後に挿入

（2）（注）と同じく、該当の語句の直後に注記符を用いる（凡例で断ります）

（3）該当の段落のあと、第二カッコを用いて書く。

他に何か良い方法はありますか。

【A】

もっとも簡便な方法としては、前後1行あけになると思います。直後に挿入されているので、1行あければ、わかると思います。

この方法で分かりにくい場合は、あまり使用されないかもしれませんが、「てびき」p149【備考】にありますように、第1段落挿入符で囲む方法も有効かもしれません。原文でも、2～3文字下げて書いてあるだけで、※や（注）などがないわけですので、点訳でも一般の挿入文などと同じ扱いにしてよいと思います。

6. p149 4. 挿入文の書き方

物語の中に子供のころの作文が引用されています。題名の書き出しは、何マス目からになるのでしょうか。

【A】

引用文に題名が付いている場合は、本文の見出しとの区別が難しいので、「てびき」p151【参考】にあるように、引用文全体を枠線で囲むことができます。

子どもの頃の作文も全体を枠線で囲むとよいと思います。

枠線で囲めば、本文とは独立して題名の書き出し位置を決めることができます。

7. p151 4. 挿入文の書き方 [参考]

見出しがある挿入文については、「枠線で囲むこともできる」とありますが、掲示板や新聞記事とは違うので枠線で囲むのには抵抗があります。枠線で囲まないで書くことは可能でしょうか。挿入文を二マス下げで書く場合、枠線を使わないで書くとしたら、挿入文の見出しは何マス目から書けばよいでしょうか。原本は、挿入文の見出しはカギ類などで囲まれておらず、挿入文本文の字下げと同じ位置から書かれています。地の文の見出し、また挿入文本文と区別するために、見出しを第1カギで囲んで5マス目から書くのはどうでしょうか。

〈原本〉

六百字の見解が掲載されていた。

読み方は自由でも…あらすじと解釈は区別を

私の自伝的小説『少女を埋める』には、主人公の～～

地の文の見出しは、7マスと5マス目から。六百字～は地の文。1行あけ・字下げして挿入文の見出し。さらに一行空けで挿入文本文となっています。

数600字の■見解が■掲載■されて■いた。

(1行あけ)

■■■■「読み方は■自由でも■…■あらすじと■

■■■解釈は■区別を」

■■■■私の■自伝的■小説■『少女を■埋める』には(後略)

【A】

引用文に見出しが付いている場合は本文の見出しと区別できるように、何らかの工夫が必要になります。枠線で囲めば明らかですが、全体に二マス下げで書けば、見出しで区別が付かなくても本文が下がっていますので、引用文であることが分かってよいかもしれません。

ご質問の、《読み方は自由でも…あらすじと解釈は区別を》が見出しと言えるかどうか分からないのですが、… 見出しでしょうか？

注意書きのようなものではないですか？

下の引用文を読むための注意書きのような文でしたら、全体を第1カッコで囲んで3マス目(二マス下げた場合は5マス目)から書いてはいかがでしょうか。

8. p152 5. 箇条書き

箇条書きに付いている○についての扱いを教えてください。

その日の日記にこう書いた。

《○ 工藤宣伝部長が何のために自分を呼んだか分からない・・・。

○ 工藤部長の話はもっぱら自分の自慢話に終始した・・・

はじめ、『カメラミン』をどう売るかについて考えた・・・

○ 浅野さん・・・》

山カギの中に13個の○付での文章があります。

このような場合、《は第2カギにし、○は省略すると思いますが、○付の文章が長く段落や第1カギが有ると、○有り（箇条書き）と区別がつかなくなってしまうのですがどのようにしたらよろしいでしょうか。

【A】

日記の内容が《～》で囲まれています。この囲み記号を省略して、前後1行あけにすると、○の付いた文章をすべて3マス目から書き出すことができます。それでも、分かりにくいようでしたら、点訳挿入符で断って、a. b. c.などを初めに付けて書くと分かりやすくすることができます。

9. p152 5. 箇条書き

原本では、ベスト10が①から⑩まで羅列され、そのうちのいくつかが白抜き数字になっています。後の文章に「白抜き数字は…」と説明が書かれています。点訳書凡例で断り、白抜き数字を第1カギで囲んで書いてもいいでしょうか。第2カッコを使用することも考えましたが、マス数が多くなるのでどうしたものかと検討中です。点訳書では、①からの数字は第1カッコで囲んで書いてあります。また、原本では①～⑩までは箇条書きではなく続けて書かれています。

【A】

箇条書きではなく、続けて書いてあるとすれば、数字を囲むカッコを第1カッコと第2カッコに区別して、「白抜き数字は～」の部分で、「⑤②③⑤⑥メメ②③⑤⑥②で囲んだ数字は～」のように書いたらいかがでしょうか。第2カッコは第1カッコと区別すべきカッコが必要な場合に用いる記号ですので、マス数が増えてもこの場合は最も有効となります。

①～⑩が箇条書きになっている場合は、1位～10位まで統一した書き方で書き、その上で、白抜き数字の番号の前に星印を付けるのが最も分かりやすいのではないかと思います。

2位と5位が白抜き数字になっている場合は

■■ (1)

■■③⑤③⑤■ (2)

■■ (3)

■■ (4)

■■③⑤③⑤■ (5)

■■ (6)

のようになります。

そして、「白抜き数字は～」の部分で、「星印が付いている数字は～」のようにすればよいと思います。

10. p152 6. ニマスあけ

この項に

女はやさしさを、①自分②ペット③子供に向けるために使っている。

というQ&Aがありますが、この①②③が1 2 3という裸数字の場合、数字の後はニマスあけになりますか。

1 ■■■ジブン■■■ 2 ■■■ペット■■■ 3 ■■■コドモ…

それとも数字の後にマスあけのある文の場合のみニマスあけになりますか。次のように語句と文が混ざっている場合はどうなりますか。

1 ■■■ジブン■ジシン■■■ 2 ■■■ペット■■■ 3 ■■■コドモヤ■カゾク…

箇条書きではなく、列記の場合は数字は見出しの扱いではなくなりますか。いつも迷います。

【A】

原文に①②丸囲みの数字が使っている場合は、外に差し支えがなければ、数字を第1カッコで囲む方法を採用しますが、文脈によってそれでは誤解を受ける場合などは、数字のあとにピリオドを付けた形も用います。

原文が、裸数字であっても、このような場合は、数字にピリオドを付けて後ろを一マスあけにするのが分かりやすい点訳の方法です。この場合も、文脈上、不都合がある場合は第1カッコで囲んだ形を用いてもよいのです。

数字を付けて項目が列挙してある場合は、数字の前を必ずニマスあけます。

1. ■ジブン■■■ 2. ■ペット■■■ 3. ■コドモ…

1. ■ジブン■ジシン■■■ 2. ■ペット■■■ 3. ■コドモヤ■カゾク…

となります。

11. p153「コラム29」

原本の詩の中で、助詞の前で一マス空白になっている箇所の書き方について、作者の意図があるものとして原本の通りマスあけするのでしょうか。または視覚に対す

るレイアウトとして、助詞は前の語に続くという基本で考えていいのでしょうか。
以下に数か所抜粋箇所を書きます。離れた助詞一語で文が終わった場合、続けてしまふとニュアンスが変わるのではという意見も聞かれました。

“別の世界に渡ってったんじゃろう
とイチョウが云うとった
そりゃあ良かった とわしゃ思うたよ”

“それが人生での俺の仕事だって
思いこんじまう
そういう時期がありますよ ね”

“勝手にどんどん速くなるんだ
それも毎日更にどんどん な”

【A】

詩などで、原文に1文字分の空白がある場合の判断について、「てびき」では、p153
「コラム29」で説明していますが、ここでは、点字で本来マスあけするところで、
一マスあけか二マスあけかの判断について主に書かれています。

今回のご質問は、前の語句と続けて書くか、一マスあけ、あるいは二マスあけるか
ですので、それぞれに文脈から判断することが必要になると思います。

最初の“そりゃあ良かった とわしゃ思うたよ”は、

「そりゃあ良かった」と、わしゃ思うたよ
とカギで囲むところをカギが省略された形で、「わしが思った」のは、「そりゃあ良
かったと」ではなく「そりゃあ良かった」までですので、「と」の前で一マスあけた
方がよいと思います。

ソリャア■ヨカッタ■ト■ワシャ■オモータヨ

となります。

2番目と3番目の「ね」「な」は助詞とも取れますが、相手に念を押す感動詞とも取
れます。

“そういう時期がありますよね”ではなく、“そういう時期がありますよ、ね（そう
でしょう）”

“それも毎日更にどんどんな”ではなく、“それも毎日更にどんどん、な（そうだろ
う）”

と受け取ることができると思います。

そのように考えると、「ね」「な」の前で二マスあけるのが自然ではないでしょうか。

ソー■イウ■ジキガ■アリマスヨ■■ネ

ソレモ■マイニチ■サラニ■ドンドン■■■ナ

このように、それぞれに、1文字空白の意図を文脈から判断して書くのがよいと思います。

その2 見出しの書き方

1. p154 1. 見出しの書き出し位置

見出しの大きさが2種類の場合、7マス目と5マス目見出しにしないといけないのでしょうか。9マス目、7マス目見出しにしてもよいのでしょうか

【A】

9マス目と7マス目の見出しにしてもかまいません。

標準の見出しを7マス目からと考えるとよいと思います。

標準の見出しを7マス目からにして、それよりも小さい、分量の少ない短い見出しが並んでいるような原本でしたら、7マス目と5マス目とし、

7マス目からの見出しより、大きい、例えば、「○○章～」のような見出しや、ページ替えをするような大きな見出しがある場合は、9マス目と7マス目というような決め方でも良いと思います。

7マス目と5マス目、9マス目と7マス目のどちらにしなければならないという規則はありません。

2. p154 1. 見出しの書き出し位置

7マス目からの見出しと5マス目からの見出しを使っているとした時に、原本の最後に参考文献や年表、参考資料などがある場合、見出しを著者紹介等と同じように7マス目から書いてよいですか。5マス見出しにすると、その直前の7マス見出しの中の見出しのように思えてしまいます。

【A】

原本全体の参考文献や年表、参考資料であれば、大きい見出しと揃えて書きます。

ご質問の場合は、7マス目から書くことになります。

3. p154 1. 見出しの書き出し位置

原本の目次に出ていない見出しが、文中にたくさんある場合は、小見出しを使って点訳すべきでしょうか。以下のような場合ですが、

1章 見出しA

1. 1 見出し a 1

1. 2 見出し a 2

1. 3 見出し a 3

2 章 見出し B

2. 1 見出し b 1

で、本文中には見出し a 1、a 2 の中に見出しがたくさんあります。

【A】

点訳書の見出しの大きさを考える場合は、本文の見出しにそって考えます。ご質問の原本は、本文には 3 段階の見出しがあり、第 1 章、第 2 章の見出しの下に、1. 2. 3. の見出しがあり、その下にさらに小さい見出しがあるということです。

この場合は、最も小さい見出しを 5 マス目からの見出しとし、1. 2. の見出しを 7 マス目から、第 1 章、第 2 章を 9 マス目からの見出しとします。

そして目次には、原本にはなくても 5 マス目からの見出しも載せてもよいのです。点訳書の目次は点訳書独自のものですので、原本の目次にかかわらず、点訳書の本文に準じて作成します。

4. p154 1. 見出しの書き出し位置

本文の見出しは 2 段階（7 マス目と 5 マス目）で目次は大見出しのみです。目次にはない項目が二つあります。

・前書きの前にページ替えて

バチカン市国(太字、見出し) 次行から

人口(太字) : 615人

面積(太字) : 約0.44平方キロメートル

など 5 項目

・巻末にページ替えて

関連年表(太字、見出し) 次行から

349年(太字) ペテロの墓の上に、聖堂建設

2022年(太字)まで17項目

いずれも 1 ページです。この目次にはない二つの見出しは 3 マス目からでよいでしょうか。また小見出し符を使うとするとどこに使ったらよいでしょうか。

【A】

前書きの前の「バチカン市国(太字、見出し)」は、下がり数字の 1 ページになります。とすると「まえがき」は下がり数字の 2 ページからになります。

「バチカン市国(太字、見出し)」は原文ではどのように書かれているのでしょうか？この文字だけが書いてあるのか、地図などと共に書いてあるのでしょうか。

目次は、「まえがき」の下がり数字の 2 ページから始まってもよいのですが、7 マス

目から「バチカン市国」の見出しにして、地図などを省略していれば、点訳挿入符で「チズ■ショーリャク」と入れることも考えられます。

その場合、目次に、7マス目からの見出しと同じ扱いで、「バチカン市国」といれ、下がり数字の1 ページから始まってよいと思います。

「関連年表」も7マス目からの見出しとして、目次に入れてよいと思います。

5. p154 1. 見出しの書き出し位置

原本で次のようになっています。

Prologue

ボイステックの未来

prologueの中に見出しはありません。Prologueは9マス目からの見出しです。

このような場合、

■■■■■■■■■■Prologue■■■■ボイステックの

■■■■■■■■■■■■■■■■未来

とすればよいと思うのですが、

■■■■■■■■■■■■■■■■Prologue

■■■■■■■■■■■■■■■■ボイステックの未来

という書き方をしてもよいのでしょうか。

【A】

Prologueの後ろに「ボイステックの」が十分に入りますので、2行目を二マス下げる書き方は避けた方がよいと思います。

「Prologue」と「ボイステックの未来」を行を分けて書きたいのであれば、「てびき」p157 副見出しの(3)の書き方として、二マスあげて書くことはできると思います。他の見出しに影響がなければになりますが。

6. p154 1. 見出しの書き出し位置 【処理1】

現在市議会だよりの点訳をしています。

「一般質問」の書き方は

5マス目より質問のタイトル

13マス目より質問議員名（会派名）

3マス目より 質問の内容

です。

そこで質問ですが

5マス目からのタイトルそして、13マス目からの議員名（会派名）まで書いたところでページの最後になり、次ページ3マス目より質問内容となりました。

この場合、見出しのみがページの最後に残ることになり、5マス目の見出しから次

ページに移すのか議員名まで書かれていて、これは見出しではないと判断し、そのままページの最後でよいのかということで迷っています。

【A】

議会だよりなどの場合、見出しがとても長くなり、所属と議員名も2行にわたることもありますので、見出し、議員名まで入らない場合に次ページに移すことにすると、ページの下部分が5～6行あいてしまうこともたびたびあります。また、一般質問は多くの議員が行いますので、10名、20名の一般質問が続く場合もあります。議会だよりなどの場合は、見出しが終わったところで議員名から次のページに書いてあっても、また議員名まで前のページにあって、本文が次ページ1行目から始まって、毎回書き方を統一してあれば、読みにくさはあまりないと思います。ただ、見出しの途中でページが変わることは避けます。

7. p155 2. 見出しの段階を示す文字や数字

見出しの段階が、数〇■、数〇。■、(数〇) となっています。

本文でこの一番大きな見出しを受けて、「数〇については・・・」、「数〇の(数〇)参照」とある場合、数〇の後は見出しと同じ二マスあけにするのでしょうか。

【A】

二マスあけは後ろに見出しが続く場合ですので、本文中に出てきた場合、裸数字は付属語を続けて書きます。

数1ニ■ツイテワ、

数1ノ■(数1) ■サンショー

となります。

8. p155 2. 見出しの段階を示す文字や数字

見出しについている数字の書き方をおききします。

001 まずは冠婚葬祭

002 このとしまで

...

100 人間

というように、1 2 3ではなく、001 002 003・・・100まで数字がついている場合は、原本通り「001 まずは冠婚葬祭」と点訳するのか、1の前の00をとって、「1 まずは冠婚葬祭」と点訳するのかわかりません。

【A】

この場合は、どちらにしなければならないという規則はありません。

数001、数002でも構いませんが、見出しの読みやすさからすると

数1 数2・・・の方がよいように思います。

9. p155 2. 見出しの段階を示す文字や数字

見出しの書き方について、校正で指摘してよいのか迷っています。

1段階の見出ししかない本です。

原本の見出しは、1 プレリユード 2月曜の朝 3月曜の午後 といった書き方がされています。

点訳者は、1。■プレリユード 2。■月曜の朝 と、数字の後ピリオドを入れひとマスあけて点訳しています。原本通り、数字の後ピリオドを入れず二マスで書かなくてもよいのでしょうか。

【A】

見出しに数字が付いている場合、数字の後二マスあけてもよいのですが、ピリオドを付けて一マスあけにしても差し支えありません。

見出しに付いている数字は、見出しの大きさや種類の数などによって、分かりやすいように工夫したりできます。また数字の後ろピリオドを付ける方が、二マスあけよりも、一般に分かりやすいということもあります。

このようなことから、見出しに付いた数字については、後ろ二マスあけにするか、ピリオドを用いるか、第1カッコで囲むかなど、必ず原本の通りにしなければならないわけではありません。

10. p155 2. 見出しの段階を示す文字や数字

序列を表す①②のような数字の書き方について、「てびき3版」ではカッコ類のところで「数字が○の中に書いてある場合は○をカッコなどに置き換える。」とあり、例も①普通名詞②固有名詞が書いてありましたが、第4版ではなくなってしまいました。その理由はどういうことでしょうか。点訳者が「マル1」「マル2」などを書いたりする場合があります、説明に困っています。どう説明すればよいのでしょうか。

あるいは、「マル1」「マル2」などの書き方を容認してよいのでしょうか。

【A】

見出しや箇条書きの番号を表す①②は、第1カッコで囲んで書いてもよいことは現在でも変わりません。ただ、4章の囲みの記号のところで示すべき内容ではないので、4章からは削除しました。

第5章p155 (4) で見出しの数字と段階の関係を書いていますので、そこで①②はマル1、マル2と書くのではないことを説明していただきたいと思います。

実際には①②に第1カッコが対応するわけではなく、見出しの種類や大きさによって判断することになります。

大きい方に見出しに、①が用いてあって、一段下の見出しに(1)や1. が用いてある

場合もあります。そのような場合は、①は、第1カッコで囲むのではなく、数字の後ろ二マスあけたり、数字にピリオドを付けて一マスあけたりします。そして(1)や1. を第1カッコで囲むことになります。

このようなことも、ここで説明していただきたいと思います。

11. p156 「コラム30」

段階を示す数字などがなく、見出しの段階が多い場合の書き方について、このQ&Aに「3マス目からの見出しは小見出し符のみ」とありました。

所属する団体では、探しやすいということで、カッコをつけた3マス目からの見出しを慣例として使ってきました。見出しをカッコ類や棒線で囲んで3マス目から書く書き方はお薦めではないということでしょうか。

その他の工夫として、「てびき3版Q&A2集」Q116の《行頭のあけ幅が同じでも、より大きい見出しにカギ類を付ける、より小さい見出しを棒線で囲む、またはカッコ類で囲むなどの方法》は、7マス目・5マス目からの見出しに限って、可能ということでしょうか。

もし、3マス目からカッコ類で囲ったものを見出しにできる場合、長い見出しで1行に入りきらないときは、次行は二マス下げですか、それとも、次行は二マス上げて、一マス目から書くことになりますか。

見出しに続く本文が2～3ページにおよぶ長い場合でも、小見出し符を使って書いてもよいでしょうか。

【A】

見出しの最も小さい形は、小見出し符を付けた見出しになります。備考、注意など、短い項目で、見出しとまでは行かないが、本文と区別しなければならないときに第1カッコで囲んで用いる方法がありますが、それ以外に、見出しとして3マス目から書くことはありません。

3マス目から書いた場合は、2行目以降は行頭一マス目から書くことになります。カッコで囲んで3マス目から書く、棒線で3マス目から書くのは、探しやすいとは言えないと思います。地の文でもカッコで始まることもありますし、棒線から始まることもありますので、区別が付きません。

「てびき3版Q&A第2集」Q116には、最後に「ただし、これらの方法は一般書ではできるだけ避ける…」との注意書きがありますので、ご注意ください。

見出しに番号などが付いていなくて、9マス目、7マス目、5マス目、小見出し符の4段階より多い場合、9マス目から始める最も大きい見出しをカギで囲み、カギで囲まない9マス目からの見出しと区別して5段階にする。

または、点訳書凡例で断って、A. B. などの記号を付ける等の方法があります。見出しの段階が多いと、小さい見出しに工夫する方が多いのですが、小さい見出し

が多いと、見出しなのかどうか分かりにくくなる、見出しの変わり目が分からなくなるといえます。

大きい見出しは、用いられる回数が少なく、行頭のマスあけが多いので、見出しと分かりやすい、またページ替えすることもできますので、行頭のあけ幅の大きい見出しで工夫することを考えた方がいいと思います。

小見出し符は、本文が長い場合も用いることはできますが、原文の書き流しの見出しなどに割り当ててるものですので、点訳しても長くて数ページ程度だと思います。小見出し符を付けた見出しが長い場合は、見出しごとに行あけをすると分かりにくさは避けられると思います。

12. p156 「コラム30」

1 1. (1) (一) の4つの見出しがあります。文章中に1. を指して第1項と書いてあるのですが、ダイ1. コーと書いてよいのでしょうか。また、見出しの順番は1 1. (1) 次の(一)は第1カギでもよいのでしょうか。

【A】

第1項の場合は、1. を指していても、ダイ数1コーと書きます。

見出しが4段階ある場合、大きい方の見出しに同じ形を用いられないかを検討します。たとえば、最も大きい見出しは点訳書1巻のなかで1～2回しか出てこないような場合、

9マス目から 数1 ■■

7マス目から 数1 ■■

7マス目から 数1. ■

5マス目から (1)

とすると、(1) までの形で書くことができます。

または、一番大きい9マス目からの見出しを、ローマ数字のI. とすることも考えられます。

さらに、一番小さい見出しが小見出し符を用いる見出しであれば

9マス目から 数1 ■■

7マス目から 数1. ■

5マス目から (1) ■

小見出し符を用いる見出し 数1. ■

としてもよいと思います。

「コラム30」にあるように、できるだけ、第1カッコ以外の囲みの記号は用いないように工夫するのがよいと思います。

13. p157 3. 副見出し

副見出しの定義を教えてください。

岩波新書の「死者と霊性－近代を問い直す」の見出しの下に以下の二つの見出しがあります。

＜提言＞ 近代という宴の後で・・・・末本文美士

＜座談会＞死者と霊性・・・・末本文美士（司会）・中島隆博・若松英輔・安藤礼二
・中島岳志

＜・・・＞で囲まれた語の後ろの語は副見出しと考えるのでしょうか。

副見出しとすると、＜・・・＞を外して、

テイゲン■ー■キンダイト■イウ■ウタゲノ～と点訳するのでしょうか。

今までこのような場合、一続きの見出しと考えて二マスあけで処理してきました。

はじめに テレワークお試しキャンペーンが、企業に投げつけたもの

という見出しの場合は副見出しということで、「はじめに」のあとに棒線を入れて点訳しました。

「てびき」にある副見出しの例と少しニュアンスがちがうように思えるのですが、二マスあけて点訳する語句は、「はじめに」「あとがき」「プロローグ」「エピローグ」などのあとでも副見出しと定義するのでしょうか。

今回の岩波新書の＜提言＞、＜座談会＞の見出しの書き方も教えてください。

【A】

「てびき」p157では、副見出しの書き方として、(1) (2) (3) の方法を示していますので、棒線でつないでも、二マスあけても、1段小さい見出しとして書いてもよいと言っています。ですから必ず棒線でつながなくてはならないわけではありません。

副見出しは、新聞などでは、袖見出し、脇見出しなどとも言われ、主見出しを補足するようなサブ的な見出しとなります。

質問で挙げられた＜提言＞＜座談会＞などは、副見出しではなく、主見出しの冠的に、その見出し全体の形式を示していますので、これまで点訳なさっていたように二マスあけて、主見出しを書いてよいと思います。

「はじめに」「あとがき」「プロローグ」「エピローグ」のあとに、より具体的な内容を示す見出しがある場合は、二マスあけても、棒線でつないでもよいと思います。

「副見出し」という語は、上記のように考えられますが、きっちりと定義し書き分けることも難しいですし、それを、必ず棒線でつながなくてはならないということもありませんので、複数の方法があるという視点に立って、点訳書全体のレイアウトを検討して、読みやすいように点訳をしていただければよいと思います

14. p157 3. 副見出し

副題の前後の棒線ですが、後ろの棒線だけが次行に入ってしまった場合、棒線だけで1行使ってよいのでしょうか。

【A】

図書の副書名を②⑤②⑤の点で囲んで書くのは標題紙ですが、「てびき」p198 (2)にありますように副書名は書名と行を替えて書きますので、②⑤②⑤の線だけが次行に来ないようにバランスよく書きます。

奥付の副書名は、棒線でつなぎますから、後ろには②⑤②⑤の線は入れません。

なお、見出しの後ろに棒線を用いて続ける副見出しを本文中に書く場合には、「てびき」p157「3. 副見出し」(1)に棒線でつなぐ方法がありますので、奥付と同様に、後ろの棒線を省くことをお勧めします。

15. p157 3. 副見出し

「副見出し」の点訳例がありますが、後ろに棒線がありません。これは原文の副見出しに棒線の囲みが無いからですか。それとも副見出しが棒線で囲まれていても後ろの棒線は省略してもよいのでしょうか。

【A】

副見出しも棒線でつなぐことをお勧めしています。「てびき」p157 3. 副見出し(1)にあるように、棒線でつなぎます。

原文で、棒線で囲まれていれば、原文のとおりを書くという意見もありますし、それで間違いと言うことはありません。が、後ろの棒線だけが入らずに、次の行の9マス目や11マス目から②⑤②⑤の点だけを書くことになったり、目次でも項目の最後に棒線を書き、その後ろに②の点を書くことになり、点字の形が美しくないの、点訳フォーラムとしてはお勧めしません。

16. p158 4. 見出しと本文との行あけ

7マス目からの見出しでページ替えをしてもよいのでしょうか。見出しは、1種類です。

1巻のページ数は、全部の見出しでページ替えしても、135ページ位です。

7マス目見出しなら、1行あけが適当だという意見もあります。原文は、見出しでページ替えされています。

【A】

7マス目からの見出しで、ページ替えをしてはいけないということはありません。

見出しが1種類ですので、7マス目からの見出しにするのは適切だと思います。

1行あけにするか、ページ替えにするかは、各見出しごとが互いに連続性が強いのか、内容が独立しているかで判断します。短編小説や主人公や登場人物は共通していて

も独立した物語で成り立っている本、アンソロジーなどはページ替えがよいと思いますし、1編の小説で連続性が強ければ、1行あけでよいと思います。

「てびき」p158 「4. 見出しと本文との行あけ」では、(2)の最後に「大きな区切り目では原文に準じてページを替えてよい。」とありますので、前述したような短編小説などの場合で、原文でページ替えしてあれば、7マス目からの見出しでもページ替えしてよいことになります。

あくまでも、各見出しの連続性、独立の度合いで判断してください。

17. p158 4. 見出しと本文との行あけ (2)

「ハンドブック第5章編」p15に「表の中やレシピなど内容によっては、前の本文と5マス目からの見出しを行あけしないで書くこともできる」とありますが、これは表中やレシピなど限定的ですか。「内容によっては」についても教えてください。

9マス、7マスあと5マス見出しがいくつも続くような場合、5マス見出しに同列の関連性があれば行あけせず書くことも可能ですか。(人物紹介・店名紹介等)

【A】

「てびき」p158 4. (2)にありますように、《見出しが変わる場合は、前の本文と見出しの間を1行あけたり、～読みやすくする。》とありますので、5マス目からの見出しが続く場合も、1行あけた方がよいと思います。

ただ、ハンドブックにありますように、表は、枠線で囲んだ中にあり、枠線外の見出しとは別に、7マス目、5マス目の見出しを設定しますので、小さい項目は行あけしないで書くことがあります。レシピも、材料、準備、作り方など、小さい項目で同じ内容が繰り返し出てきますので、行あけしなくても順序がわかるということがあります。このような場合は、見出しの前を1行あけしないで書くこともできます。

ずいぶん以前（手書きや製版印刷機で作成していた時代）は、用紙の節約などの意味で、見出しの前を行あけしない方法もありましたが、20～30年前頃からは、読みやすさ、分かりやすさの点から、5マス目からの見出しの前も1行あけしていますので、広報誌やその他でレイアウトが特殊な場合や紙数制約がある場合などを除き、一般の図書は1行あけした方がよいと思います。

18. p158 4. 見出しと本文との行あけ (2)

見出しの変わり目で、1行あけか、ページ替えをするかで迷っています。

『ケーキ嫌いの』の原本の点訳において、見出しは7マスと5マス見出しです。

原本の状況は、各見出しは、互いに連続性なく、内容が独立しています。

見出しでページ替えをしてあるのは、全見出し数の約7割で、すべての見出しはそうになっていません。「てびき」に「原本に準じてページ替えしてよい。」とあります

が、内容は独立していますが、全見出しがページ替えしていない状況の場合、どのように考えたらよいのでしょうか。

【A】

『ケーキ嫌い』（姫野カオルコ著）でしょうか。

原本の前の方だけ見てみますと、ケーキ嫌いの著者の食に関するエッセイで、数ページ～10ページ程度の文章が30以上収載されたもののようです。

7マス目から始まる見出しの前もすべて1行あけでよいと思います。

同じ大きさの見出しが原本でページ替えになっていたり、同じページで数行あけて書いてあったりした場合も、点字では、1行あけにするか、ページ替えにするかの書き方を揃えるようにします。

1行あけでよい理由の一つは、食に関するエッセイ集ですので、内容的に独立性が低いと思われることです。一人の作家によるものでも独立した短編であったり、大部なもので各章ごとにページ替えしてあるようなものなどは点訳でもページを替えてよいと思います。

もう一つは、原本が写真を含めて268ページですので、点訳して全3巻程度ではないかと思います。それに7マス目からの見出しが30以上もありますから、ページ替えをするまでもないと思われます。

「てびき」p158は、「大きな区切り目では原文に準じてページを替えてよい」ですので、ページを替えてもよいし、替えなくてもよいのです。また今回の場合は「大きな区切り目」にも当たりませんので、1行あけでよいと思います。

19. p158 4. 見出しと本文との行あけ (2)

1冊の本に第○章の9マス目からの見出し、7マス目からの見出し、5マス目からの見出しがあります。ページ替えできるのは9マス目からの見出しが始まるときのみでしょうか。7マス目からの見出しが始まる場所ではページ替えできませんか。

【A】

ページ替えは、本文のなかでは最も大きな区切り目となりますので、一般には最も大きな見出しだけページ替えにします。

ですが、点訳して10巻程度にもなるような大きな図書で、1章で1巻を越えるような場合は、その下の「節」でもページ替えをすることは考えられます。

20. p158 4. 見出しと本文との行あけ (2)

見出しの書き方についてお尋ねします。

見出しの前は1行あけるものだと思っていたのですが、あけずに続けているものも目にします。点訳者の判断で1行あけをせずに見出しを書いてもよいのでしょうか。

【A】

一般書では、規則にありますように「前の本文と見出しの間を1行あけたり、区切り線を引いたり（ページ替え）して」書きます。

ただ、表の枠線の中や料理のレシピ（材料と作り方など）では、ごく短い内容でもレイアウトの関係で5マス目から書いたりしますので、1行あけをしないで書く事もあります。

また、サピエにアップするような図書ではなく、読者が限定される広報誌などは、紙数の制限などもあり、行あけしない場合もあります。

このように特殊な例以外は、1行あけるかページ替えをすることになります。

ずいぶん以前に点訳された本では、このようなルールの統一がありませんでしたので、行あけされていない図書もみかけることがあります。

21. p158 5. 書き流しの見出し

カギを付けた5マス目見出しの中の場合ですが、小見出し符のあとに段落を含む20行以上の文章が来てもよいでしょうか。あるいは、小見出し符の替わりに第1カッコで囲んではどうでしょうか。

【A】

小見出し符を付ける見出しを第1カッコで囲むということでしょうか。

小さな見出しのような働きをする語をカッコで囲むことはあります。それは、（例）

（注意）（備考）のごく短い言葉で、本文の流れとは少し異なるような内容を示す場合です。このような語にも小見出し符を付けて用いることもあります。

そのような場合でなく、書き流しの見出しで段落を含む文章が続いている場合は、その見出しをカッコで囲むことは適切ではありません。3マス目からカッコで囲まれていれば、見出しとは認識しないで読んでしまいます。

5マス目から始まる見出しより小さい見出しであれば、第1小見出し符を用いることになります。その内容が長い場合は、次の小見出しとの間を1行あけることも考えられます。

また、原本全体のレイアウトを検討しなおし、5マス目から始まる見出しを7マス目から、7マス目から始まる見出しを9マス目からのようにできないかと考えてみてはいかがでしょうか。

22. p158 5. 書き流しの見出し

書き流しの見出しで、小見出し符類を使用せず棒線に置き換えた場合、棒線の後ろで行替えして本文を書き始めることはできますか。

【A】

棒線の後は一マスあけですので、棒線の後ろでの改行は普通はしません。

書き流しの見出しには小見出し符を用いるのがよいと思います。

書き流しの見出しに小見出し符を使用して、そのなかにさらに、前の項目と後ろの語句や文をつなぐような必要がある場合に棒線を用いることはあります。

棒線はいろいろな場面で便利に使用できますが、本来は前後の語句をつないだり、対等な関係を示したりする記号ですので、小見出し符と同等の働きをするものではありません。

23. p159 6. 出典表示

本文中の手紙の差出人の書き方について、2行で行末揃えになっています。(手紙の前後は1行あけです)

短いものは・・・

いつもあなたの友人

マーガレット

長いものは・・・

あなたの友人の中でいちばん墮落した友

しかも日に日に墮落の度合いが増している気がするマーガレット

このような時の書き方はどうなりますか。

【A】

筆者の署名ですので、行末に揃えて書きます。長いものでも11マス目から書きはじめ、2行目以降を13マス目から書くと、4行に入ります。

なお、このように一連の内容が、原文で行を替えて行末に揃えて書かれている場合、点字では、原文の行替えの通りではなく一連の扱いにして、行末に寄せて書きます。ご質問の場合、原文で

あなたの友人の中でいちばん墮落した友

しかも日に日に墮落の度合いが増している気がするマーガレット

と書かれていても、「墮落した友」で行替えをしなくてもよいのです。

24. p159 6. 出典表示

あとがきの文末の日付と署名についてですが、原本ではあとがき本文の後1行あけ、行の半分より下の方に

2022年元旦 パリ、辻仁成

と書いてあります。

日付を5マス目から書くと1行に入りますが、5マス目からの書き出しでいいでしょう

か。それとも、11マス目より後ろから、2行に書いた方がいいでしょうか。

【A】

原本で行末に書いてある場合は、やはり点字でも行末に書いた方がよいと思います。年月日が行頭近くに、氏名が行末近くに書いてあるような場合は、年月日を5マス目から書いてよいのですが、5マス目から32マス目まで1行に書いてあるのは、原本の印象とずいぶん異なります。

この例の場合は、15マス目から、年月日と場所をかき、次行二マスさげて、人名を書くのが最も落ち着く書き方のように思います

25. p160 「コラム31」

引用文の行末に（翻訳を要約）と記載があります。その次のページの引用文には（同）となっています。カッコの点訳はどのようにしたら良いでしょうか。

①句点の後二マスあけ

②改行して3マス目から

③行を替えて行末に書く

（例）…知らないわけがない。

（翻訳を要約）

…みなされてしまうわけです。

（同）

①知らない■わけが■ない。■■■（翻訳を要約）

② 知らない■わけが■ない。（改行）

■■■（翻訳を要約）

③ 知らない■わけが■ない。

（次行行末に）（翻訳を要約）

【A】

原文で同じ行の行末に書いてあるのであれば、句点の後二マスあけてカッコを書いてよいと思います。

また、（同）も、（ドー）では分かりませんので、（翻訳を要約）と書くのがよいと思います。

その3 詩歌・戯曲などの書き方

1. p161 1. 詩 (4)

小学生向けの詩集です。詩の冒頭に題名と作者名が同じ行に書かれています。例えば、題名が「木」で、作者名が「与田準一」の場合でも、作者名は次行の末に書く

のでしょうか。空白の部分が多く、児童向けでもあり、作者名を見落とすのではとも思います。二マスあけなどで同じ行に、題名と作者名を続けて書くなど是可以でしょうか。

【A】

詩の場合は、タイトルの次の行の行末に作者名を書くのが一般的ですので、そのように統一するのがよいと思います。

詩のタイトルと作者名の書き方は、その本の中では統一して書きます。

詩のタイトルと作者名を二マスあけて同じ行に書くことはできますが、すべての詩がタイトルと作者名が1行に入るかどうかわかりませんので、一般的な書き方のほうがよいと思います。次行に作者名が来ることが分かっていたら、読み落とす心配も少ないと思います。

2. p166 2. 短歌・俳句・川柳など

サラリーマン川柳を点訳中です。

1. 原本で1句を3行に書き分けてある場合、2行目または3行目がページをまたぐ場合の対応、雅号だけページをまたぐ場合の対応はどうしたらよいのでしょうか。句の頭から次のページに移った方がよいのでしょうか。雅号は行末に揃えているのでページをまたぐとわかりにくいと思います。また、句が1行で書いてある場合も同じです。

1つずらすと、その他の句にも影響するので、最終的に、句の途中や句と雅号が離れている場合は、同じページに収まるように調整したほうがよいのでしょうか。どのような点訳の仕方が読みやすい点訳なのか分からなくて悩んでいます。

2. 川柳の中は、一マスあけで点訳していますが、「。」「!」「?」が句中にある場合は、二マスあけにしても良いのでしょうか。

【A】

1. 句と句の間を1行あけて書く場合は、句の途中でページが変わっても、句と作者の間でページが変わっても構わないと思います。1行あいていれば新たな川柳であることが分かりますので、それ以外に行あけはしない方が分かりやすいと思います。ただ、句の変わり目が1行目の場合も1行あけます。

2. 句点がある場合は後ろを二マスあけ、疑問符・感嘆符でも文末と判断できれば二マスあけになります。

たとえば、

話聞け！スマホいじるな！「メモですが」

投資しろ？俺の財布を透視しろ！

のような場合は、
話聞け！■■スマホいじるな！■■「メモですが」
投資しろ？■■俺の財布を透視しろ！
となります。

3. p169 3. 戯曲・対談などの書き方

漫画の書き方について質問します。

1コマの中に人物Aさんがいます。其のコマの中にAさんを挟んで吹き出しが2個ありそれぞれにセリフが書かれています。

- 1 「あ」「お疲れ様です」
- 2 「絵は書けたけど」「文字は何を書こうかしら」
- 3 「なーんか」「久しぶりに赤毛のアンよみかえしたくなっちゃった」
- 4 「後悔したくない」「きもち？」

このように同一人物のせりふを第一かぎで括った場合のマス開けは2マス明けでよいですか。てびきやフォーラム等で調べた限りではそのように考えました。色々な人との話し合いでは一マスあけで良いのではとの考えもありました。

【A】

漫画のレイアウトは、文章で表現する場合と異なり、一コマの中での人物の大きさや配置などによって変わってくると思いますので、一コマの中の同一人物のセリフは、一つのカギに収めた方が分かりやすいと思います。

人物の後ろ二マスあけとして以下に書きます。

- 1
外大A■■「ア■オツカレサマデス」
- 2
外大A■■「エワ■カケタケド■モジワ■ナニヲ■カコーカシラ」
- 3
外大A■■「ナーンカ■ヒサシブリニ■～
- 4
外大A■■「コーカイ■シタク■ナイ■キモチ？」
のようになります。

4. p169 3. 戯曲・対談などの書き方

「指導者ハンドブック第5章編」の戯曲・対談などの書き方についてお尋ねします。

問2 源三（モノローグ）で、人物名の後二マスあけではなく、カッコの前はマスあけなしになるのは、どうしてでしょうか。

「表記法」 p122リア王物語内の例で

コーディーリア第2小見出し符■(独白)

とあり、記号の原則でと言うことでしょうか。

「てびき」例1－2

真紀■■■(収に)

など、二マスあけになる場合と混乱するのですが、ポイントを教えてください。

問3 インタビュアー(棒線)の後は一マスあけですが、これは二マスあけの例と考え、人物名のあと小見出し符使用にした時、インタビュアー(棒線)の後も書き方の規則どおりに小見出し符使用でも大丈夫でしょうか。

問4 情景の説明で

場所 荻窪の中華料理店

時間 午後1時頃

中華料理を囲みながら・・・

行あけ

ですが、段落挿入符で囲まないのはなぜでしょうか。

文の最初だから囲まなくても分かるからなのか。また、囲んでもよいのか。

【A】

問2 この場面は、源三としのの対話の形をとっていますが、このセリフだけは「モノローグ」であることを示しているのです、このカッコは、注釈的説明に当たります。ですから前の語に続けて書きます。

問3 インタビュアーを棒線で表した場合、棒線のあと小見出し符にすることはできません。小見出し符類は、言葉を含む記号類に付けることはありますが単独の記号に用いることは想定されていません。

原文で、インタビュアーを棒線で示してある場合は、問4の書き方となります。

問4 この問いは、戯曲ではなく対談です。p170【処理1】で対談での話し手の動作や表情等を記すカッコには第1カッコを用いることが書かれていますが、対談の設定の説明などは、戯曲とは異なっていますので、段落挿入符を用いるという規則はありません。

5. p172 4. 手紙文や公用文の書き方

エッセイ集の最後にある日付の書き方については、「Q&A第2集」Q122では行頭から少し下げて書いてある日付は5マス目から書くのが一般的と書かれています。こ

のエッセイは日付が行末に書かれているのですが、その場合も5マス目からでよいでしょうか。それとも原本通り行末に書いた方がよいのでしょうか。

【A】

特に決まりはありませんが、年月日は長くなることもありますので5マス目から書く落ち着いたと思います。

ただ、「6月吉日 筆者」のように、行末に署名と共に書いてあったりする場合は、行末に揃えて、収まりよく書いたり、行末に日付と署名を2行に分けて書いたりすることもあります。かならず原文通りというわけではなく、点字での読みやすさや収まりも考慮して決めるのがよいと思います。

6. p172 4. 手紙文や公用文の書き方

文章の中に手紙文が挿入されています。

原文

ストラテンバーグ市教育長、カーメン・ストゥープ博士

拝啓

わたくしは・・・送る所存です。

敬具

一市民より

宛先と拝啓を行頭1文字目から、「わたくしは」が行頭2文字目から書き始めています。

敬具、一市民よりは右端に書かれています。

点訳する時は、宛先（2行になります）と拝啓は1マス目からでよいでしょうか。

文末を右詰にすると、敬具が27マス目、一市民が25マス目からの書き出しで良いでしょうか。

手紙文では拝啓のあと1文字あけて本文を始めますがそれに合わせてなくてもよいでしょうか。

【A】

相手の職名、名前などは一マス目から書く書き方もありますが、「てびき」ではp173に3マス目からの例を示しています。

「ストラテンバーグ市教育長、カーメン・ストゥープ博士」は役職と敬称付きの名前になりますので、読点を省略して

■■ストラテンバーグ市教育長

■■■■カーメン・ストゥープ博士

と書くのが、一般的な書き方になります。

次行、3マス目から「拝啓」で改行

次行、3マス目から「わたくしは～」と本文を書き、「敬具」と「一市民より」はお考えのとおり、行末に書いてよいと思います。

その4 表や図の書き方

1. p174 1. 表の書き方

表についての質問です。今校正をしています。指摘してよいのかわからずお尋ねします。

(1) 原本に日本の世界遺産一覧と書かれていて文化庁のホームページ掲載の一覧があります。前後に文章があるのではなく独立した形で書かれています。ただし目次に掲載はされていません。点訳者は枠線で囲まず、「日本の世界遺産一覧」を見出しとし、次行に点訳挿入符でどのように書くかを説明した後それぞれの遺産名を書いています。そのあとにも[日本遺産リスト]があるのですが同じように書かれています。こちらはページ数が多く点字で40ページほどあります。表は枠線で囲んで書くと思っていましたが、一般の文章を書くように書いてもよいのでしょうか。

(2) 「日本の世界遺産一覧」のNo.の書き方についてです。点訳者は「数1■■■」と2マスあけにしています。原本の数字にピリオドはありません。見出しの場合は、数字の後ピリオド、ひとマスあけより2マスあけの方が大きな見出しになるということですが、表などの場合、数字の書き方の基準を教えてください。

(3) 星印についてです。「日本遺産リスト」の一部の自治体名の後に※、△、○印が付いていて、※は2018年5月24日。△は2019年5月20日追加認定。○は……。という説明があります。てびきの星印(4)には第3星印、文中注記符を用いて書くことができるとし例が載っていますが、印が3種類ある場合はどのようにすればよいのでしょうか。

(4) 「日本の世界遺産一覧」に「ル・コルビュジエの建築作品」があります。所在地が2段になっていて東京都の下に※フランス、ドイツ、スイス、…と書かれています。この※はどのように書けばよいのでしょうか。※の説明はありません。

【A】

(1) 「てびき」には、「本文との区別を明らかにするため、表の前後を枠線で囲む」とありますが、ご質問の「日本の世界遺産一覧」「日本遺産リスト」は、点字で40ページにも及ぶもののようです。とするとこれは、枠線で囲む効果はありませんので、囲んでいないことを校正の対象にはしなくてよいと思います。ただ、これは本文とは異なる資料ですということが分かるようにした方がよいですし、この一覧が本文の間に挟まれていると本文の流れが途切れて、この表は飛ばして、まず本文だけを読みたいという方にも不親切になると思います。考えられる方法としては、

点訳書凡例で、《原本〇〇（例えば、第〇章）に「日本の世界遺産一覧」「日本遺産リスト」があるが、この表は、最終巻の巻末（第〇巻〇〇ページから）に掲載した。》と断って、本文（あとがきも）が終わったところでページを替えて書き、点訳書の目次にも見出しとして立てるのが分かりやすいと思います。

（２）表の中や箇条書きの番号などには、１ ■■ １． ■ （１） ■ のどれを用いても間違いではありません。原本の書き方に準じてよいですし、他の見出しとのわかりやすさを考えて、原本では裸数字でも（１）を用いるなど、特に決まりはありません。

（３）後ろに※、△、○などが付いている場合、必ずしも星印を用いなくてもよいと思います。この場合、たとえば、数字付きの文中注記符で区別する方法もあります。

※ は、文中注記符 1、△は、文中注記符 2、○は、文中注記符 3 などにして、文中注記符の説明をいればよいと思います。この表に別に数字付きの文中注記符が用いられている場合は、0 1、0 2、0 3 などの番号を付けることもできます。

または、※は2018年、△は2019年の追加認定であれば、自治体名の後ろに第 1 カッコで囲み(数 1 8) (数 1 9) (数 2 0) などのように入れることもできます、もちろん《自治体名のカッコ内の数字は～》のように、説明を入れます。

（４）※の場合、多くは追加説明です。この場合も追加説明ですので、東京都のうしろに、第 1 カッコで囲んで（フランス、ドイツ、スイス・・・）と書くのがよいと思います。※に星印を用いると、必ず行替えして書かなければなりませんから、レイアウトが崩れて読みにくくなる場合が多いと言えます。

2. p174 1. 表の書き方

見出しの下に表があります。横軸と縦軸に項目が書かれているだけでタイトルがなく、見出しがタイトルのようになっています。

「てびき」の例では枠線の中にタイトルが書かれていますが、これは決まりでしょうか。枠線の中に入れた場合、他の見出しの続きのようになってしまいませんか。また、タイトルを見出しとして目次に入れたい場合、枠線の外のものでなければ見出しとして扱えないとか、枠線の中か外かによる違いはありますか。

【A】

表のタイトルは必ず必要というわけではありません。枠線の次行にすぐに点訳挿入符で表の書き方の説明を入れてもよいと思います。

または、本文の見出しと表のタイトルが同じ場合は、本文の見出しを書き、開きの枠線を書いて、枠線内にまた見出しを書いても良いと思います。どちらにするかは、分かりやすい方を選びます。

3. p174 1. 表の書き方 (2)

枠線で囲んだ表の中の見出しは7マス目にしています。

項目ごとに表の内容を書くのですが、この項目を5マス目の見出しにすると、各項目の前は1行アケにするのでしょうか。10項目ほどあります。

【A】

枠線の中では、本文とは独立したレイアウトになりますので、本文で5マス目からの見出しの前を1行あけていても、枠線の中では行をあけないで書くこともできます。枠線の中では、各項目が数行で終わっても、項目の見出しを5マス目から書くことも多くありますので、行あけをしないで書くこともできます。

4. p175 1. 表の書き方 (2) ②

表の項目が長く多いとき、略記したことを示す方法で、以下のようにしたものを見たことがあります。間違いではありませんか？

点挿で「表中の略記は次のとおり」と書き、次行から略記したものと元の項目の間を棒線でつないで、1項目ずつ改行していきます。

もしこのようにするなら、点挿は前述の部分だけでいいですか？あるいは最後の項目の行末に付けますか？

【A】

表や図の書き方は、点訳挿入符で囲んで説明しますが、「表中の略記は次のとおり」を点訳挿入符で囲み、改行して、略記の仕方を書いていく書き方もあると思います。元の語が長く、略記が多い場合などには、分かりやすいと思います。また、断ってあることによって、これは点訳に際して書いた部分であることが分かりますので、特に枠線で囲んだ表や図の中では、項目の最後まで点訳挿入符で囲まなくても問題はないと思います。

5. p175 「コラム32」

表の書き方についてです。校正をしています但校正で指摘してよいのか判断に迷っています。

(1) 労働市場訓練プログラム終了後の状況という表です。

((項目■■ 9 0 日後 ■ 1 8 0 日後の ■ 順に ■ 記す。単位はp))という点挿があり、
就職■■ 15.9 ■ 18.6
失業■■ 13.6 ■ 10.4

といった書き方で6項目あります。

数字の間のマスあけですが、一マスあけが不都合な理由もないので、一マスあけにしたということですが、こういう場合二マスあけか読点を入れると思っていたのですが、一マスあけでよいのでしょうか。

もし、二マスあけする場合は、点挿でも 90 日後■■ 180 日後と、二マスあけた方がよいのでしょうか。それとも点挿では表でのマスあけに関係なく一マスあけて書いてよいのでしょうか。

【A】

表の書き方としては、縦に読んでも数字が比較できるように、数符を縦に揃えて書くのが基本ですが、ご質問の書き方は、追い込みで書かれています。このような場合も、数字と数字の間は二マスあけが基本になります。その場合点訳挿入符の中も、数字と数字の間のマスあけと揃えて、二マスあけにします。追い込みで書く場合は、読点を用いてもよいと思います。点訳挿入符の中でも読点を用います。

数字と数字の間を一マスあけにするのは、一マスにすれば、一つの項目の数字を 1 行に収めることができ、縦に数符を揃えることができるような場合になります。

表にするメリットは、縦横に数字を比較することができる点にありますので、この程度の項目数であれば、表にして書く方がよいのではないかと思います。書き方は、「てびき」p175「コラム32」や例 1～例 3 を参考にしてください。

6. p175 「コラム32」

原本の年表の書き方についてご指導をお願いいたします。

関連年表とあり、上段に西暦、中段に個人の履歴、下段に日本と世界の動きが表記されています。中段の個人の履歴は下段に比べ、半分程度の事項が表記されています。

最初の点訳挿入符で

《以下、表中、第2カギ…第2カギで囲んだ事項は「個人の履歴」を、それ以外は「日本と世界の動き」を示す。》

とし、西暦の後に小見出し符を使い、箇条書きで中段の事項は第2カギで囲み、下段の事項はカギで囲まずに書きました。

そのような書き方でよいでしょうか。

【A】

点訳なされた方法でよいと思います。

または、

西暦 小見出し符 個人の履歴 点線 日本と世界の動き
のように書いてもよいと思います。

年表にカギ類が使われているかどうか、点線や棒線が使われているかなどによって、読みやすい方法で点訳してください。

7. p175 「コラム32」

項目が多い数表を、同じ枠線内で二つに分割して点訳することにしました。

一つの表は原則通り 4 桁で区切る書き方

「数 1 マン■数 5 6 7 0 =エン」で、それぞれ項目ごとに改行し、数値を書いていく方法にしました。

もう片方の表は縦軸横軸がある数表で、位取り点を使用する書き方にするとちょうど項目が収まり、バランスがよい書き方となりました。

同じ枠線内で数表を分割して点訳する場合、数字の書き方はそろえたほうがよいでしょうか。同じ枠内ではありますが、属する見出しは別になります。

【A】

内容が具体的にわからないのですが、

たとえば、各工業地帯の総生産額と、生産品目の比較のような複数の帯グラフを表にする場合、総生産額を別に先に書き、残りの品目は縦横で比較できる表にすることがあります。そのような場合でしたら、総生産額は、4 桁で区切る書き方にして、各品目の比較は位取り点を使用するという書き方はできます。

その方が読みやすいと思います。

表の内容にもよりますが、数字の書き方を揃えなくてはいけないということはないと思います。

8. p175「コラム32」

表の書き方について質問します。

移住の人気順位表です。

左端に順位があり、次に、市町村名、以下、各項目に点数がついています。

1 いすみ市 慣用度 8 税源 5 自然 9 医療 1 0 定住度 9

以下 2 位以下が続きます。

追い込みで書いていくにはどのように書くのが分かりやすいでしょうか。

【A】

この場合は、追い込みではなく、縦横に項目を揃えた表にする方が読みやすいと思います。追い込みにするには、項目が多すぎますし、各項目が覚えにくい並びになっています。

項目と点数を一マスあけて入れるには、19マス必要ですので、14マス目から項目と点数（最大二桁）を入れます。そのためには、一マス目から、順位を書き、一桁のうちは二マスあけて市町村名、二桁になれば一マスあけて市町村名を12マス目までに入れます。千葉県54市町村で、市・町・村を省略すれば、殆どの市町村は12マス目までに入ります。最もマス数が必要な「南房総市」「横芝光町」「大網白里市」は、途中のマスあけを省略するか、12マス目まで入れて後ろを省略するなどの工夫をします。点数は縦に数符を揃えます。

各項目は、3 マス以内に略記します。「慣用度」（寛容度？）を「カン」、「税源」を

「ゼイ」、「自然」を「シゼ」、「医療」を「イリヨ」、「定住度」を「テイ」と、点訳挿入符で断ればよいと思います。

このようにすれば、きれいに収まりますし、各市町村の順位が縦、横で比較でき、わかりやすいと思います。

なお、表を書く上での注意事項、「てびき」 p175 (2)④、コラム32 2.などを参照してください。

9. p183 2. 図の書き方

「知識ゼロでも楽しく読める！ 心理学」（斎藤勇 監修）を点訳しています。

図の番号の付け方についてお教えいただきたいと思います。

第1章、全84ページで、32の節に分けて書かれています。節ごとの、文章中に図1、図2、右図などとあり、図がたくさんあります。節が変わるごとに、ズ1 ズ2など、すべて原本通りに書くのでしょうか。または、図を全巻通し番号にするのがよいのでしょうか。

【A】

基本的に、原本の通りでよいと思います。

ネット上でためし読みをしてみたところ、各項、見開きで、左ページに本文、右ページに、図1、図2の二つの図があり、本文の該当箇所に（図1）（図2）と入っているようです。それ以外の図には番号が付いていないようです。このようにタイトル全体として統一した配置になっているようですので、原本通りに書くのがよいと思います。

なお、17ページまでしか見ることができませんでしたので、異なる節の図を参照する場合もあるかもしれません。そのようなときには、おそらく原本にも「〇〇ページ」のように参照ページが入っていると思います。その場合は、点訳書の巻数とページを入れます。

10. p183 2. 図の書き方

写真が複数枚あり、キャプションがついているものとついていないものが混在している本です。写真の内容説明については全て省略し、キャプション付きのものだけ、キャプションのみを点訳することとしました。

点訳方法として複数写真がある場合、各見出しの終わりに仕切りの線を引き、そのあと「シャシン■■■数〇マイ」と見出しを作り、そのあとにキャプションを書くこととしました。

写真の全部にキャプションがついてあった場合は、枚数が書かれてあればより親切だなと思ってつけたのですが、キャプションなしとありが混在していたら、点訳しているキャプションの数と枚数が合わずに読者が違和感を覚えるのではないかとの

意見がありました。全部にキャプションがついていれば枚数明記、そうでなければ枚数を入れない、もしくはキャプションありの枚数だけをとという風に臨機応変に対応してもいいのでしょうか。

てびきの例（p186）のように番号がふってあればよいのですが、ふっていないことも多いです。何か良い方法があればご教示いただけないでしょうか。

【A】

写真の処理については、「てびき」p207「9. 点訳書凡例」の⑥にありますように、点訳書凡例で断ることをお勧めしています。

原本の位置ではなく、各見出しの終わりなどにまとめて入れることが多いと思いますので、その位置を示す必要があります。その際、写真に番号を付けたことや、キャプションのある写真だけを示したこと、またはキャプションのない写真には点訳挿入符で簡単な説明を入れたことなどを書くことにすれば、点訳の意図も伝わりますし、工夫して分かりやすく書くことができます。

ご質問のような処理の仕方の場合、例えば、

写真は各見出しの最後に、キャプションの付いているものだけを書きました。また、掲載順に番号を付けました。

のようにすればよいと思います。

11. p183 2. 図の書き方

写真が複数あります。その中にはキャプションが場所と日付だけのものがあります。例えば、賢島 平成27年8月8日といったものです。その場合、写真の説明を入れた方がよいのでしょうか。

校正をしているのですが、点訳者は写真の説明を入れています。写真は基本キャプションだけでよいと思っていましたが、どのようにするのがよいのでしょうか。

点訳書凡例で写真はキャプションのみ記しましたと書けばよいと思いますが、いかがでしょうか。

【A】

その写真がその本を読む上で重要な役割を果たしていて、本文に写真の説明がないような場合、例えば心理学関係の本で、喜怒哀楽の表情を説明しないと本文の理解に繋がらないような場合や、学習書で写真を見ながら問題を解くような場合は、写真の客観的な説明が必要になりますが、一般書で、挿絵のような役割をしている写真の場合は、お考えの通り、点訳書凡例で断ってキャプションのみを書くのがよいと思います。

写真の説明は点訳者の主観が入らないように、客観的にする必要がありますし、写真の全てを文章化はできませんので、どの部分を切り取るかも重要になってきます。また、冗長になると本文の流れを中断することになりますので、その点も注意が必

要です。

現在校正されている本には、点訳者が説明を入れているとのことですので、その説明が著者によるものか、点訳者が書いたものかが区別ができるようになっているかどうか、説明が客観的でその原本に適しているかなどを判断して、校正をすることが必要になると思います。

12. p183 2. 図の書き方

原本の冒頭に「本書関連地図（ロシア西部～ヨーロッパ）」が記載されています。地図上に各国の国名がかかれ、バルカン半島は詳細図をいれて、国名が記載されています。

①各国名を順に記すことでよいでしょうか。

②地図は省略とするのでしょうか。その場合目次の項目も省略するのでしょうか。

【A】

「地図」に書かれている内容を全く書かずに省略する場合は、点訳書凡例に「地図は省略しました。」と書き、目次にも入れません。

「地図」に書かれている国名だけでも入れる場合は、目次にも入れます。

「地図」の見出しを書き、点訳挿入符で、「ロシア西部～ヨーロッパ、及びバルカン半島の詳細図があるが、国名だけを記した。」などを書いて、国名だけを書けばよいと思います。

色分けなどがされていて、何か手がかりがある場合は、その分類別に記すなどの工夫をすると分かりやすいと思います。

13. p183 2. 図の書き方

原本の中に写真や地図があります。写真は筆者の当時の姿で特に説明はありません。また地図も付近を表しているだけで説明はありません。省略してもよさそうに感じますが、その際省略した事を書く必要があるのかないのか気になります。

【A】

説明、キャプションの付いていない写真やイラストのような地図は、イラスト挿絵と同じように考えて省略してよいと思いますし、点訳書凡例などに断る必要も無いと思います。

14. p183 2. 図の書き方

家系図において、「てびき」では親子関係と兄弟関係は例として挙げられています。婚姻関係はどのように表すのが適切でしょうか。

【A】

家系図の書き方に決まりはありませんが、「てびき」では第3版から家系図の書き方

を例として挙げていますので、「てびき」の書き方が広く用いられています。ただここには婚姻関係の書き方が示されていないので、「てびき3版ハンドブック5章編」でその例を挙げてみました。

「ハンドブック5章編」p44 10. の例を参考になさってください。解答はp127にあります。その例では婚姻関係を第2カギで囲んでいます。

なお、「ハンドブック5章編」は絶版になっていて購入はできません。お近くの施設に問い合わせしてみてください。

または、全視情協ホームページ各種資料 (<http://www.naiiv.net/material/>) で問題をダウンロードできます。解答はサピエに点字データがアップされていますので、必要な場合はダウンロードしてご使用ください。

15. p183 2. 図の書き方

原本の円グラフが右回りに、「行けない 11.8%」「関心がない 26.1%」「よくわからない 44.5%」「その他 16.0%」「無回答 1.7%」とあります。

この場合、数値の大きい順にそれぞれ3マス目から書こうと思いますが、数値には関係なくそのままの順で書いた方がいいですか。

【A】

円グラフは、時計の12時の線から右回りに、調査の目的に合わせてデータを並べるのが基本ですので、割合の大きい順に並んでいるわけではありません。

この円グラフの場合は、「行けない」と答えた人が何%かが最も知りたい内容ですので、「行けない 11.8%」「関心がない 26.1%」「よくわからない 44.5%」「その他 16.0%」「無回答 1.7%」の順に書くのが基本になると思います。

16. p183 2. 図の書き方

原本に8か所図表が記載されています。

そのうち、2、3の図表の内容把握が、複数の点訳者で読み解くのですが、困難です。表示の範囲、内容に不明な点が多く、無理に読み解き、表記するのが不安です。わかる範囲での書き記しはするつもりです。点訳書凡例で断り、本文中でも該当図表を省略したことを記することは可能でしょうか。その場合の判断基準、凡例例文などもお願いします。

【A】

原本の図表のなかには、本文に概要が書いてあり、原文内容の読み取り、理解に差し支えがない図表も多くありますし、また、概要が分かればすべて説明をしなくてもよいものや、墨字を読む人も視覚的な傾向を大まかにみるだけの図表なども含まれます。

できるだけ点訳した方がよいものの、何ページにもわたる表になって、原文の意図

する主な内容から離れてしまうようでは省略した方がよいとも言えます。

点訳書凡例で、《図表は原則として枠線で囲んで記したが、差し支えのない場合は省略した。》と断わり、本文の該当箇所で、図表の番号、タイトルを入れ、その後に、ショーリャクと書けばよいと思います。

図表をそのままの形でなく、文章で説明する場合も枠線の中に書きます。点訳挿入符で、《図を言葉で説明する》《図を文章化して記す》などと断ります。

17. p186 「コラム33」



5マス～16マスの仕切りの線と1行あけとでは、1行あけのほうが大きい区切りと理解してよいでしょうか。「てびき」p186「コラム33」の例のように仕切り線の後、5マスから「シャシン」と書きその後に説明を書いて、1行あけて3マス目から小見出し符のつく見出しを書くというのでは、小見出し符つき見出しが「シャシン」の下に含まれるように感じるのですが、前を1行あけていれば、こういう書き方もできるのでしょうか。それとも、この例のように、5マス目以降の見出しが来るようなところの前に、5マスからの仕切り線・シャシンは入れるべきですか？

【A】

「仕切りのための線」と1行あけとでは、1行あけの方が大きい区切りと考えています。「仕切りのための線」は、1行あけの見出しの始まりと前の本文の終わりとの間に、仕切りが欲しいときに入れる線として、「てびき4版」で初めて提案しました。ですから、「てびき」の例のように、その項目の写真の説明や注記の説明などに主に使用すると考えてください。

「仕切りのための線」を1行あけの小見出し符を用いた見出しの仕切りに使用することは、あまり考えてはいませんでした。しかし、1行あけの方が大きい区切りですので、仕切り線の下に5マス目からの見出しを入れなければ用いても構わないと思います。誤読を誘うような使用は避けるようにしたいと思います。

18. p186 「コラム33」

写真の書き方について、1枚の写真ごとにキャプションが付いているものと、2枚、3枚の写真に一つのキャプションが付いているものがあります。その場合キャプションだけ書くということではよいのでしょうか。それとも写真が2枚の場合は、(1)、 (2)  キャプション、もしくは、キャプション点挿2枚の写真点挿というように写真の枚数もわかるようにしたほうがよいのでしょうか。写真に(1)(2)と番号が振られているわけではありません。またキャプションのない写真についてですが、点訳者が説明を加えて点訳書に入れる必要があるのでしょうか。

【A】

写真の処理については、その本で、統一した方法を定め、必要に応じて点訳書凡例

で断って、その通りに点訳します。

- ・ 本の内容にあまり関係の無い写真の場合は、すべて省略する
- ・ キャプションの付いている写真だけを、各見出しの最後にまとめて書く。まとめて書く場合には、便宜上 1. 2. 3. などの番号を振る
- ・ 写真が内容に深く関わっているような場合は、すべての写真に順に番号を振って、キャプションと点訳者の説明が分かるように書き分ける。

等の方法があると思いますので、点訳にあたってどのような書き方にするかを決めることが大切です。校正は点訳の方針に従って校正することになると思います。

書き方を決めれば、必ずしも写真の枚数が分かるようにしなければならないものではありません。

19. p188 3. 区切り線・枠線 (2) ③

開きの枠線上に「ヒョー」「コラム」などを入れる場合の書き出し位置について、5マス目、7マス目、あるいは9マス目から入れるとあります。

「てびき」の例では、すべて9マス目から書かれています。7マス目・5マス目から書きだすのは、どのような場合ですか。

また、枠内にある「表の見出し」「コラムの見出し」の書き出し位置は、枠線上の書き出し位置から二マスあげると考えていいのでしょうか。

【A】

開きの枠線上、言葉を入れる場合は、5マス目、7マス目、9マス目のいずれでもよいのですが、5マス目からでは、枠線の書き始めから3マスだけしか線がありませんので、「点訳フォーラム」としては、7マス目か9マス目から書くことをお勧めします。1タイトル内では統一するようにします。

表の見出しの書き出し位置は、7マス目から書くのが、もっとも一般的です。枠線上の「ヒョー」などの書き出し位置に左右されることはありません。

20. p189 「コラム34」

原本に注があります。注は番号をつけて文中注記符をつけ、各節の本文終わりに、5マス目から仕切りのための線をひき、注記をいれることにしました。

1. その本には、一箇所だけ節の最後に四角の枠で囲んだ図があります。この図の説明文を、本文の終わりに行あけなしで枠線で囲んで入れるのですが、注記も記載する場合、閉じの枠線の次行に、仕切りのための線は必要ですか。

2. ところどころに写真があり、キャプションのみを記載することにしました。同じ節に注記とキャプションの両方がある場合、本文終わりの仕切りのための線は、注記とキャプションの前のそれぞれに必要ですか。

3. 別の原本で、本文とは別の枠にグラフとそのグラフを説明する文章があります。

説明文のみを記載する場合、節の最後に仕切りのための線を入れて、書いてもいいでしょうか。

【A】

「コラム34」にありますように、見出しと見出しの間を1行あけにした場合に、それより小さい区切りを示すときに仕切りのための線を入れます。

ですので、その本で、文中注記符を付けた語句の説明のために仕切りのための線を使用すると決めた場合は、表などを閉じる枠線の下にも省略しないで線を入れます。この線は、その見出しの写真を最後にまとめて記すような場合も用いることができます。ですが、あくまでも、本文の内容理解にはさほど必要でなく、本文と離れていても差し支えない写真番号と短いキャプションを入れるようなときに、用います。

3. のご質問のように、グラフの説明が書いてあるような場合は、本文の該当位置に枠線で囲んで入れるのが良いと思います。

仕切りのための線は、あくまでも本文と離れていても差し支えないものをまとめて記すために用います。

仕切りのための線には、とくに規則はありませんので、本文が終わって仕切りのための線を入れ、注記を書いて、また仕切りの線を入れ写真説明を入れても間違いとは言えませんし、仕切りのための線を入れて、まずは注記を書き、注記が終わった次の行に、3マス目や5マス目から、第1カッコなどで囲んで「シャシン」と入れるなどの工夫をしてもよいと思います。その間に行あけはせず、1行あけて次の見出しになります。

その5 ルビやマークなどの書き方

1. p192 2. ルビの付いた言葉の書き方 (2) 【処理】

ルビのついた漢字の用例についての質問です。

犯罪小説の点訳をしており、隠語と思われるルビのついた言葉が多く出てきます。

たとえば、拳銃（チャカ）、連絡（ツナギ）、面倒見（ケツモチ）などです。

隠語ではありますが、犯罪小説にはよく見られる言葉ですから、1回目はチャカ（ケンジュー）、ツナギ（レンラク）、ケツモチ（メンドーミ）などとし、2回目以降は、ルビのみを書いています。

質問は、この点訳本が複数巻の場合、ルビと漢字本来の読みを書く処理は、最初に出てきた巻のみでいいのか、それとも巻ごとの1回目に処理をしておく必要があるかどうかです。

【A】

犯罪小説などにはよく見られる隠語のようですし、「ツナギ」などは、(連絡)と書いていなくても想像がつかますので、一度、ツナギ(レンラク)と書けば、後は必要ないと思います。

ただ、初めて見る人には、思い出しにくい言葉もあると思いますので、想像が付きにくいような隠語は、各巻で初出の時に、チャカ(ケンジュー)のように入れるのがよいと思います。

全ての語で統一した処理をしなくてもよいと思います。

2. p192 2. ルビの付いた言葉の書き方 (2) 【処理】

ルビの付いた語の2回目以降の書き方について、「てびき」では「文脈から判断して、ルビを書くか元の漢字の読みを書く」とされています。最初に「アポイント(ヤクソク)」と点訳した場合、2回目以降は「アポイント」としても「ヤクソク」としてもいいのでしょうか。

原文で2回目以降も「約束」と書いてあると「ヤクソク」と点訳しがちですが、言葉の使い方に差がない場合は、「アポイント」と校正した方がよいのでしょうか。

【A】

原本全体の文体や舞台、背景、文脈などによって、どちらにするか判断することになると思います。

漢字に外国語のルビが振ってある場合は、翻訳物かどうか、物語の舞台や人物の設定などを考慮して読みを決めるのがよいと思います。

1箇所だけにルビがある場合は、そこだけ異なったニュアンスで書かれているのかも判断する必要があると思います。

また、日本語であれば、一般的で読みやすい語に、馴染みのない長い原音でルビがある場合も、すべて原音で書いた方がよいのか、判断することが必要になってきます。

3. p192 1. ルビの付いた言葉の書き方 (3)

次のような文が本にありました。

先日ドイツ人の書いた『Das Integrationsparadox (統合のパラドックス)』という本をよみました。

(Das Integ～の上に、ダス インテグラチオンパラドックス とルビがついています。)

この項のQ&Aでは、アプリ名なので先に外国語を書くと思いますが、上は、ドイツ語の本のタイトルです(著者はドイツ語の本を読んでいます)。この場合、ドイツ語を先に書いてから、ルビをカッコ内に書くべきか、普通の場合のように、ルビ(ド

イツ語)と書くべきか、悩んでいます。

日本の雑誌などでも、雑誌名が外国語のアルファベットで、ルビがついているものもあります。考え方などもあわせて教えていただけると嬉しいです。

【A】

余り馴染みのないドイツ語に読みやすいようにルビを振ったのだと思いますので、この場合は、「てびき」p191【処理】と同様の考え方で、ルビを先に書くのが親切だと思います。

『ダス■インテグラチオン■パラドックス (引大Das■大Integrationsparadox引■トーゴーノ■パラドックス)』と、ドイツ語と日本語は一つのカッコの中にまとめて書いてよいと思います。

原語にルビが振ってある場合は、原語を読みにくい(読めない)人への配慮ですので、多くはルビの方を先に書いた方がよいと思いますが、多くの人に馴染みのある一般的な英語や、Q&Aにあるアプリ名などは、ルビをカッコで囲んでそこは飛ばし読みもできるようにした方がよいと思います。

4. p193 2. マーク類の書き方

「I♥東京」や「I♥TOKYO」などのハートマークは「ラブ」もしくは「LOVE」で点訳可能ですか。(原文では、どちらもIのあとは、ハートのマーク)

【A】

「I♥東京」や「I♥TOKYO」を、文脈から判断して「I love 東京」「I love TOKYO」と点訳することもあるかもしれませんが、その場合も、loveは「ハートマーク」であることを点訳挿入符などで補った方がよいと思います。

5. p193 2. マーク類の書き方

行頭にチェックマークを入れる□がついた文の□の書き方について質問です。

空欄符号、伏字符号は使えないので箇条書きとして□を省略してよいでしょうか。この1ページ後に「チェックリスト」として同じ文をまとめて書いた表があります。ここの書き方としては、見出しの後に点訳挿入符を使い次のようにしました。

「各項目のまえのチェックマークを入れる空欄の省略、便宜上各項目の始めにa.～j.の番号を付けた」というような内容を付記しました。

【A】

前の方は、□を省略して箇条書きにするのがよいと思います。

チェックリストの表の方は、お考えのように《○○ページと同じ文が掲載されています。各項目冒頭にチェックを入れる欄があります。》などのように点訳挿入符で説明するとよいと思います。冒頭に記号や番号を補うのが有効な場合もあると思いま

すが、単にチェックすることだけが想定されている場合は、番号なしの箇条書きでもよいと思います。

「〇〇ページ」には点訳書の該当ページを入れます。点訳でも前のページであれば「ゼンページ」でもよいと思います。

6. p193 2. マーク類の書き方

架空の人種が話す会話文で謎の文字が出てきます。

アルファベットの「N（エヌ）」をフニャフニャに曲げたような形です。数多く使用されており、各々の場所で数も異なります（連続して同じ文字が書かれています）。ゲームの世界のため会話文には点線や棒線が多数出てくるため点訳挿入符で「不明」と入れ凡例に書きました。

会話文なので読点もあり、文字数も違うので「不明」だけでは不十分と校正で指摘がありました。どのような工夫があるでしょうか。

例1.

とりにんげんわ、ことばとすら おもえない きみよーな おとで こたえた。
「《ふめい》」

例2

「《ふめい》！」
ふりむくと、かぎづめの はえた ひだりてで がけを ゆびさして いる。

例3

「しのん さん、 もー 《ふめい》のですか？」

例4

「そーですか…。ぼくわ ばしんぞくに 《ふめい》 ことわ ありませんが、
なんとーの ぎよる へいげんを おーだん するなら 《ふめい》な じゅんび
が ひつよーです。…」
のように出てきます。

【A】

例を読むと、点挿で囲んで「フメイ」でもよいかもしれませんが、メの字で表せば、もっとスッキリするように思いました。

基本はメの字3マスで表し、どうしても2語であることが必要な場合は、間にマスあけを挟んで、メの字6マスで書くこともできます。うしろに助詞、助動詞や句読符も続けて表すことができますので、スッキリするのではないかと思います。

もちろん、点訳書凡例で断ります。

7. p193 2. マーク類の書き方

敬語の基礎は、動詞の尊敬形と謙譲形を使い分けること（例、○尊お尋ねになる、

○謙お尋ねする) なのですが、この○尊と
○謙の形がそろっていない動詞が大量にあるそうです。

〈○尊、○謙は丸のなかに尊、謙が書かれています。〉

これを①のように(尊)と点訳して外側のカッコを第2カッコにするのでしょうか。
またその時(尊)の後ろは一マスあけでしょうか。

【A】

この表現はここだけでしょうか、それともこのあと、○尊、○謙 の表現が複数回
使用されるのでしょうか？

ここだけの場合は、○尊、○謙の略記は用いずに、

(例、■尊敬形■お尋ねに■なる、■謙譲形■お尋ね■する) なのですが、■この
■尊敬形と■謙譲形の■形が■～
と書く方がよいと思います。

このあと、複数回使用される場合は、第1カッコを用い、(ソン)、(ケン) として

(例、(ソン) ■お尋ねに■なる、■(ケン) ■お尋ね■する) なのですが、■この
■(ソン) と■(ケン) の■形が■～■大量に■あるそうです。■■点挿尊敬形が
■(ソン)、■謙譲形が■(ケン) で■表されて■いる。点挿
のように断って書くとよいと思います。

なお、第1カッコの中に第1カッコになっても、この場合、誤解を招くことは無い
と思われます。

8. p194 2. マーク類の書き方 (4)

ポプラ社のPR誌名、asta* の書き方についてお教え願います。

astaの右肩についている*は実際には読まないもので視覚的な装飾と考えて点訳で
は省略してもよいのでしょうか。記号のアスタリスクを用いて書くのでしょうか。

【A】

読みは「アスタ」で、「*」は読みませんので、「*」は点訳しないでよいと思いま
す。「*」が付いている場合も付いていない場合もありますし、これは、実際のデザ
インとしては「アスタリスク」の記号では無く、「花」の模様のように見えます。花
模様を記号化して書く場合に「*」の記号を用いているようです。

9. p195 2. マーク類の書き方【処理3】

《ネスカフェのインスタントコーヒーのCMといえば、なんといっても遠藤周作と北
杜夫が有名である。♪ダバダ～♪なCMにより、この二作家の作品を、あこがれの心
理で読む若者が、当時は急増した。》

と原文にあります。「ダバダ～」の前後にそれぞれ音符マークがあります。

この音符マークの処理はどのように考えたらよいのでしょうか。

【A】

音符の記号で囲まれていますので、カギ類で囲んで「ダバダー」とするのがいいのではないかと思います。前後の文脈と「ダバダー」でメロディであることが分かります。

その6 本文以外の割り付け

1. p197 2. ページの付け方

ページの付け方についてお尋ねします。前書き序文などは下がり数字を用いるとされていますが、序章も下がり数字を用いるのでしょうか。

序章 第1章…第10章 終章とある本です。

【A】

まえがき、序文、はじめに、序章などは、「てびき」p197 2. にあるように、本文と独立している場合は下がり数字でページを付け、本文の内容と連続性が強い場合は、本文と通しページにします。

ただ、「まえがき、序文、はじめに」などより「序章」はすでに本文の内容が始まっている場合が多いように思います。そのような場合は、序章から、1ページとします。

2. p197 2. ページの付け方

「てびき」に「まえがきなどが本文の内容と連続性が強い場合は、本文と通しページとする。」とありますが、“本文の内容と連続性が強い場合”とは、具体的にどういう場合なのでしょう。今点訳している本では、はじめに・プロローグ・本文（第1章～第6章）おわりに があります。

“はじめに”では著者がこの本を書くに至った経緯が8ページほど書かれ、最後の行末に著者名が書かれています。（はじめに＝まえがきと解釈していますが）

【A】

現在点訳されている原本では、「はじめに」は下がり数字でページを付けます。下がり数字でページを付ける典型的な「まえがき」の例になると思います。

「てびき」で「本文の内容と連続性が強い」と言っているのは、「まえがき」からすでに小説などの読み物の内容が始まっている場合を想定しています。

3. p198 3. 標題紙

上・下等、標題紙に書く巻次について「原本を点訳するのですから、原本通りとします。」との回答があります。原本標題紙の巻次は、1・2、①・②、(上)・(下)、

また菱形の中に数字や漢字がある場合などさまざまです。原本の扉と奥付は同じ場合も異なる場合もあります。その時は「てびき」 p198 【処理1】を参考に奥付の記載に従うということでもいいでしょうか。

『運命の人』（山崎豊子 文藝春秋）は標題紙・扉・奥付の3カ所が同じで、菱形の中に数字があります。もちろん書誌は数字のみです。同じように菱形が使われている本では、数字や漢字だけ、またはカッコに替えられていることがあります。今回のような場合、巻次はどのように点訳するのがよいのでしょうか。他にも原本から判断できない場合はどうすればよいのでしょうか。

【A】

『運命の人』（山崎豊子 文藝春秋）は、菱形のなかに数字が書いてあるスタイルに統一されているようです。

菱形に数字は、点字では書き表せないなので、(1) (2) と第1カッコで囲んで書くのがよいと思います。

墨字では視覚的にいろいろなデザインができますが、点字では、第1カッコで囲むか、裸数字で書くかの判断になります。

原本奥付を元に、巻次が何も囲みがなく、1・2・上・下などと書かれていれば、点字でも 数1 ジョー などと囲み記号を用いないで書き、(1) ① (上) などと囲み記号で囲まれていれば、点字では第1カッコで囲んで書くようにするのがよいと思います。

4. p198 3. 標題紙

標題紙と奥付の著者名表記について。

原本(家康その一言 ―精神科医がその心の軌跡を辿る―)では表紙にも奥付にも著者名がありません。書誌情報にもないようです。目次には著者名が書いてあります。この場合、点訳書の標題紙と奥付は、どのようにするのがいいのでしょうか。

「てびき」では、標題紙、奥付共に、著者情報は必須項目のように思われます。本の中を見れば著者名がわかるのならば、点訳書の標題紙、奥付に入れたほうがいいのでしょうか。書誌情報にもないようなので迷っています。

また、原本の奥付には、書名、発行日、発行 静岡文化財団(住所あり)、編集・制作 株式会社創碧社(住所なし)の項目があります。

【A】

この図書は、「静岡県文化財団」が企画・発行している「しずおか文化新書」シリーズの中の1冊のようです。

このように、著者名などが表示されていない刊行物の場合、標題紙や奥付の著者情報には、発行者名を書くのがよいと思います。

この図書は、国立国会図書館の書誌でも、WebcatでもCiNiiでも、「著作者など」の

欄に「静岡県文化財団」と記載されていますので、この方法が適していると思います。

実際には、「発行」か「編集・発行」かは原本に書かれているとおりにしてください。奥付は、「てびき」p 203にあるように必須の項目は定めていますが、記載順や記載方法は決めていませんので、原本に準じて書けばよいと思います。

書名（副書名、シリーズ名など）

発行日

発行所

発行所住所

が入っていればよいと思いますが、編集・制作者名があれば、それも原本奥付の位置に従って入れてよいと思います。

奥付は、「必要事項を取捨選択して記載する」がルールですので、普通の小説などと異なる今回のような場合は、あまり書き方に拘らなくてよいと思います。ただ、全巻を通して同じ書き方にします。

なお、一例として、「点訳のてびき」も著者名表示はありませんので、点字版の奥付は、書名、発行日、編集・発行、住所の順になっています。

5. p198 3. 標題紙

翻訳本を点訳していますが、原本表紙カバーと扉に邦題とともに原書名も併記されており、扉の裏面には「The Scarlet Feather 1948 by Frank Gruber」とあります。しかし奥付には原書名の表記はありません。またサピエ図書館の着手登録には「注記・分類・件名など」の中に「原書名」として「The scarlet feather」と入力されています。

この場合原書名も入れた方がよいのでしょうか。入れるとしたらどのように入れるのがよいのでしょうか。

【A】

奥付に無い場合は、標題紙にも奥付にも原題は入れません。

著者紹介などに、原書名や著者名などがあると思いますので、一般には、扉の裏面に書いてあっても「The Scarlet Feather 1948 by Frank Gruber」は省略してよいと思います。ただ、施設や団体の判断によっては入れる場合もあるかも知れません。

6. p198 3. 標題紙 【処理1】

児童書で表紙には ○○作となっていて、裏には著者紹介、奥付には明記されていません。このような場合、どれかに統一するのですか。それとも表紙は作で目次と紹介、奥付は著者としますか。

【A】

「著・作」などは、一般には、奥付の表記に従って統一しますが、奥付にその表示がない場合は、判断ができませんので、「てびき」p198【処理1】にありますように、「サピエ」のTRC-MARCで判断するのがよいと思います。

どうしても判断が付かない場合は、より一般的な「著」を選んで統一して良いと思います。

7. p200 4. 目次

7マス目から書く見出し1に対して、5マス目からの見出し（小見出し、原本2ページ満たないぐらいです）が10程度あるエッセイを点訳しています。原本の目次にはすべての見出しが書かれていてページ数も記載してあります。この場合点訳本の目次は小見出しは省略して7マス目からの見出しのみを書いてもいいのでしょうか。ページ数の少ない小見出しも書くのでしょうか。

【A】

一般に、原本の目次にも小見出しまで載っている場合は、点訳書の目次にも掲載します。

例えば、新聞連載のコラムを単行本化したような場合など、このような形は割合よく見られます。1話1話完結していますし、タイトルから内容への想像がふくらんだり、読後にそのエピソードをもう一度読みたいときも役に立ちます。

点訳書の目次が8～10ページ程度にもなる場合もありますが、点字編集システムの見出し指定機能を用いれば、苦勞しないでできます。

8. p200 4. 目次 (3)

見出しの最後に点線がある場合で、点訳の目次のつながりを⑤の点にした時、点線だけが次の行になり一マスあけて⑤の点が続き、ページ数を書くのは読みづらくないでしょうか。また、前の語をつけて改行した場合、前の行が18マスで終わる場合があります。それでは逆に読みづらいのではと思ってしまいます。どの処理が良いでしょうか。

【A】

目次は書き方が定まっていますので、2行目に点線だけが来て、そのあとに⑤の点が長く続いても、読みづらいということはないと思います。ページ数が書いてある位置も決まっていますので、ページ数と見出しを結ぶ点が長くなってもむしろ規則通りに定型で書いた方が安定して読めると思います。

9. p200 4. 目次

見出しに点訳挿入符で説明が必要となったものがあり、見出しの次行3マス目から

点訳挿入符を入れました。その場合、目次はどのように書くのがよいのでしょうか。

【A】

目次には、5マス目、あるいは7マス目、9マス目から書いた見出しだけを入れます。点訳挿入符の部分は目次には入れません。

10. p200 4. 目次

歌集の目次の書き方について、点字目次と原本目次を書けばよいのでしょうか。その場合の書き方はどうすればよいのでしょうか。それとも、原本ページだけ書けばよいのでしょうか。晴眼者と共有の歌集で、歌声喫茶で使用します。

【A】

原本のページを示すには、二つの方法があります。

一つは、目次に点訳書ページと原本ページを示す方法です。「点訳のてびき」の点字版では、23マス目から点訳書ページ、その後にカッコで囲んで原本ページを書いています。

もう一つは、奇数ページのページ行に、原本のページを入れる方法です。「てびき」p206 「7. 欄外見出し」および、点訳フォーラム「点訳に関する質問にお答えします」の第5章その6「p206 7. 欄外見出し【処理】」に関連する内容を取り上げていますので参考にしてください。

なお、点訳書で原本ページだけを目次を書くことは、しません。

11. p201 4. 目次 (5)

目次に関して質問します。

見出しの途中で分冊した場合、

① 1段上の見出しの再掲部分で見出しに副見出しがある場合、副見出しを省略し、見出しのみを書いてもいいのでしょうか

② ①同様、本文1ページの書き始めも副見出しを省略できるのでしょうか

③ 1段上の見出しの再掲は、29マス目以降に続けて書いてもいいのでしょうか

【A】

①②ともに、基本的には、副見出しも含め全て書くのがよいと思います。しかし、副見出しも含めると4～5行になるような長い見出しの場合は、副見出しを省略することもあるかもしれません。「てびき」に特に記載はありませんので、見出しの長さなどを考慮して判断してよいと思います。

③は、目次には29マス目以降には見出しの文字を書くことはできません。

12. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

児童図書の著者紹介のところにイラストレーターの紹介もあります。挿絵の説明を

省略した場合は、その紹介はどうしたらよいのでしょうか。

【A】

著者紹介にイラストレーターの紹介がある場合、その扱いについてはルールはありません。紹介があるから点訳するという考えもあります。また、点訳書では、たとえば挿絵の説明を入れたとしても、挿絵そのものを入れるわけではないので、奥付の挿絵画家の名前や著者紹介のイラストレーターの紹介を省略するという考えもあります。それは各施設・団体で決めていただくことになります。

13. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

巻末に

本書は書下ろしです。

この物語はフィクションです。

など、初出・注意書き・その他、違う要素のものが併記されている場合、それぞれ、1項目ごとに区切り線を引いてページ替えした方がよいのでしょうか？

【A】

本文が終わった後の、あとがき、著者紹介、索引などはそれぞれにページ替えをして書きますが、それ以外の初出や注意書きなどが短い文章で掲載されている項目は、後書きの後ろにいたり、数項目をまとめて入れたりします。その都度ページ替えはしません。

14. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

巻末に《この作品は〇〇文庫のために書き下ろされました》とあります。

このような巻末の文を入れる場所を当館で統一したいと思っているのですが、

本文が終わったあと

あとがき・索引等、著者紹介の順で書き

著者紹介の後ろに巻末の文章を入れるようにしてもよいのでしょうか？

【A】

著者紹介は、最終巻の巻末（奥付の前）ということは、広く認識されている慣習的なレイアウトですので、そこは避けた方がよいと思います。

索引は、ある場合もない場合もありますが、これも独立したものですので、この前がよいのではないかと思います。

本文の最後、またはあとがきのあとに入れるのが落ち着くと思います。原則改ページとなりますが、最後の余白が大きく該当の文章が短い場合は、1行あけなどで入れてもよいと思います。

15. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

新書版の評論です。巻末に参考文献があります。

目次には「参考文献」のみあります。

内容は、見出しの後、日本の図書が3ページ、欧文文献の見出しのあと原語で2ページ、そのあと インターネット情報の見出しで3ページ、公文書館（原語）数行、フィールド調査1行、インタビュー2ページ、参考記事が見出しのあと数行表記されています。

このなかで、欧文文献は省略することができるでしょうか。

【A】

原本の内容にもよりますが、本文の特定の箇所に対応する引用文献ではなく、著者が原本を執筆する上で参考にしたという書籍の紹介でしたら、原語の欧文文献を省略することもありうると思います。その場合は省略したことを必ず断ります。

16. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

点訳している本に原本と別に初回特典として原本注記（サピエの詳細検索で確認）がついています。所属団にお尋ねしたら広告的なものは必要ないが番外編的な内容なら必要と指導されました。内容は番外編的内容のお話と思われます。点訳本のどの位置に点訳したらよいですか。見出しとして原本注記として良いですか。点訳している本は『最強侯爵様と異世界キッチンカーはじめました 私には過保護すぎるのが難点ですが！？』です。

【A】

この本をネットでみると、「初回限定ss付き」とありますので、1枚もののショートストーリーが付いているのではないかと思います。

その内容が、物語の最初に関係しているのだとしたら、物語が始まる前に付けた方がよいと思いますが、物語の流れとは無関係のショートストーリーでしたら、本文が終わった最後に付けるのがよいと思います。

「原文注記」というのは書誌用語ですので、一般用語としては用いません。原本情報について追加して書いておくべき事がある場合に、サピエの書誌に書き込む情報のことを言います。

ですから、点訳する場合は、ショートストーリーのタイトル「初回限定特典■■ミランドラ公国の最強」と書けばよいと思います。（これは、サピエの書誌情報から拾いましたので、正しいかどうかはわかりません。実際に点訳するショートストーリーのタイトルを書いてください）。

初回限定ですので、普通は点訳しなくてもよいようにも思いますが、所属団の方針に従って点訳する場合は、上記のようになると思います。

17. p203 5. まえがき・序文・凡例・あとがき・解説など

参考文献で、原本の書名が「 」で囲まれている場合は、そのまま第1カギを用いていいのでしょうか。「 」で囲まれている書名をふたえカギにする必要はあるのでしょうか。また、参考文献で以下のような書名があるのですが、副書名かどうかを調べて、副書名であれば棒線を使わなくてはいけないのでしょうか。きちんと書誌を調べて副書名であれば、原本に副書名扱いではなくてマスあけで書いている場合も、副書名として棒線をいれて、点訳すべきでしょうか？

原本の例：杉山春「児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか」（朝日新聞出版）

サピエでは書名は「児童虐待から考える」、副書名は「社会は家族に何を強いてきたか」です。

【A】

原本で、書名に『～』が使われているときだけ、ふたえカギにします。原本で書名が「～」で囲まれていれば、第1カギを用いて差し支えありません。ふたえカギに変えることはしません。

また、参考文献や引用文献は、原本の著者や出版所の見解に従い、統一した書式で書かれるのが一般的ですので、原本に書かれているとおりに書きます。よほどのことがない限り、書き方を変えることはしません。わざわざ副書名を棒線でつないだりすることはありません。

「児童虐待から考える 社会は家族に何を強いてきたか」は

「児童虐待から考える■■社会は家族に何を強いてきたか」と、二マスあけでよいと思います。

18. p203 6. 奥付

書名「1961 東京ハウス」

この本の奥付に「ルビ」があります。「イチキュウロクイチ トウキョウハウス」

この場合の書き方はルビを優先するということになりますか。

標題紙・奥付の書き方は「イチキューロクイチ（1961）■■トーキョー■■ハウス」でよいのでしょうか。本文にルビが無い場合は「イチキューロクイチ（1961）■■トーキョー■■ハウス」の文を1回書けば良いのでしょうか。

【A】

1961年のことを表していますので、「いちきゅうろくいち」と読んでも、標題紙には「数1961■■トーキョー■■ハウス」と書くのがよいと思います。

原本では、奥付にだけルビがあるとのことですが、奥付には、書名、副書名、叢書名、著者名などを書誌的に詳しく記すという意味合いがあります。点訳書では、標題紙に掲載する情報にはレイアウトの関係上、限りがありますので、著者が多い場

合など、標題紙は「〇〇ほか著」と書き、奥付には、厳密にすべてを記載します。
ですので、この本の場合も、奥付のみ原本にそって「数 1 9 6 1（イチ■キュー■
ロク■イチ）■トーキョー■ハウス」と書くのがよいと思います。
なお、数字のルビは、イチ■キュー■ロク■イチと区切って書きます。

19. p203 6. 奥付

奥付の発行所住所の記載方法について

- ① 原本の奥付には、東京本部と京都本部として2か所の住所が記載されています。
点訳書でも東京と京都の両方を記載する必要があるでしょうか。
電話番号は東京本部のものだけなので、東京の住所だけでもよいでしょうか。
- ② 紀伊国屋書店発行の本で、新宿区の住所の後、出版部（編集）とホールセール
部（営業）の電話番号、目黒区の郵便番号と住所が記載されています。電話番号は
どちらも目黒区の番号です。
この場合は、発行所住所として目黒区の住所と電話番号を記載し、新宿区の住所は
省略してもよいでしょうか。

【A】

点訳書の奥付には原本出版社の住所は必須事項になっています。
ですが、原本に書いてある全てを点訳書奥付にも入れるのか、そのなかから主な連
絡先を選択するのは、各施設・団体の判断になります。
多くの施設・団体では、主な連絡先を選択して書いている状況だと思います。
①に関しては電話番号と一致する東京の住所
②に関しては、本社の出版部が東京都目黒区下目黒3-7-10になっていますので、こ
の住所と電話番号があればそれを点訳書奥付に書くことになると思います。
選択する場合は、本の読者対応の係と思われる住所・電話番号を選ぶと良いと思い
ます。

20. p207 8. 索引

外国人の名前の書き方について、手元にある本は本文中で紹介されている作家名は
アガサ・クリスティーですが、索引では、クリスティー・アガサと表記されていま
す。他にも外国人作家の名前はたくさん出てきますが、すべて姓と名が逆になって
います。また、別の本では標題紙や奥付の著者名と著者紹介の表記が逆になってい
ることもあります。索引の場合、姓・名が逆では検索が難しいと思いますが原本通
りに点訳するべきなのか、それとも検索性を考慮して本文と同じ表記にする配慮が
必要なのか、どちらがよいのでしょうか。

【A】

名前を先に書く書き方も、姓を先に書く書き方もありますので、基本的には原本通

りでよいと思います。

索引は、配列順や点字でのページや行数の入れ方などを断ってから書きますので、その際、

- ① 索引では、本文とは異なり、姓・名の順で書いてあることを断る
- ② 原本では、索引は姓・名の順になっているが、点訳書では本文通りの書き方としたと断る

上記、①②いずれかの断りを入れるのがよいと思います。

検索のしやすさから言えば、本文中の書き方と同じにした方がよいと思いますが、原本と掲載順序が異なってきますので、十分注意を払う必要があります。

21. p207 8. 索引

原本巻末に索引（人名、書籍名、地名、などの解説）があります。ページ数が多いので別冊にした場合、標題紙はどうすればよいでしょうか。それまでのと同じ仕様で、巻数は通し番号でよいのでしょうか。目次が（大きい見出しで）索引となるのでしょうか。

【A】

同一タイトル内ですので、標題紙も同じで巻数も通し巻数にします。索引も含めて「全〇巻」になります。

ただ、最終巻が索引であることが分かった方がよいので、点訳書凡例に、「最終巻は索引です」と断ったり、標題紙の枠内（書名・副書名を入れる枠内）に、1行「サクイン」（棒線で囲むか、カッコ内に入れるなど）と入れたり、或いは、第〇巻の上の行に「サクイン」と入れたりするとよいと思います。

書き方に特にきまりはありませんので、バランスよく、分かりやすいように工夫します。

22. p207 9. 点訳書凡例

点訳書凡例について「第1巻の目次の直後に下がり数字でページをつけていれる」とありますが、2巻目に点訳書凡例を必要とする場合も、まとめて1巻目に入れるだけでよいのですか。

【A】

点訳書凡例は、通常、第1巻だけに入れます。その原本全体の留意事項を第1巻の最初に書きます。第2巻目のその箇所だけに必要な留意事項は点訳挿入符で処理します。

点訳書凡例として最初に入れた方がよいのか、点訳挿入符で該当箇所断れば良いのかは、その原本によって判断します。

ただ、索引を独立して最終巻に入れるときなどは、「索引の入れ方」「索引凡例」な

どとして、最終巻の最初に入れる場合もあります。

23. p207 9. 点訳書凡例

今、校正中の本の中に挿入文があります。原本での書き方には二通りの書き方がされています。

全体としては字下げをし、書き出し位置が1字分下げた書き方。

全体としては字下げをしているが、書き出し位置は1字下げがない挿入文。

点訳者はこの書き方の違いを示したいのか挿入文では二マス下げのインデントを使っていますが、書き出し位置は二マス下げた挿入文と書き出し位置を下げない行頭からかかれた挿入文があります。

そして点訳書凡例の中で「挿入文の書き出しは原本通りとしました。」と書いています。この点訳方法でよいでしょうか。

「てびき」p147 1. に「文章の書き始めは3マス目から書く」ことが示されています。点訳書凡例で断れば一マス目から書き始めることができるという判断でよいでしょうか。

最近点訳書凡例を書きましようとの指導でいろいろな事が点訳書凡例に書かれるようになっていきます。点訳書凡例についてもどのような時にどう使うのか教えてください。

【A】

ご質問の挿入文の場合は、お考えの通り、「てびき」p148【処理1】の原則で示されているように、挿入文の書き始めを二マス下げた位置から書き出すのがよく、点訳書凡例を設けることではないと思います。

点訳書凡例は、「てびき」p207～p208に示された①～⑬の場合に、必要となりますが、①～⑪は、「てびき」の該当項目に点訳書凡例か点訳挿入符で断ると示されています。⑫は、雑誌などの逐次刊行物で、特集の関係で、原本の位置が定まっているシリーズ物が移動しているのを、毎号の通りの位置に点訳する場合や、特集を1巻に収めるために、小さい記事を移動したりした場合など必要に応じて断ります。⑬は、原本で使われているマーク類などを、効率よく点訳するために、書き方を工夫した場合、例えば将棋の棋譜を点訳する時や、家庭科や社会科などの地図記号、洗濯マークなどが何度も出てくるので、少ないマスで表示できるよう工夫した場合などが代表的な例になります。

ご質問の場合、もし、行頭下げないで書く挿入文と、行頭を下げて書く挿入文があって、そこに著者の意図があるのであれば、原本の凡例や本文中で断ってあるはずです。墨字の読者も点字の読者も同じ条件の事項に関しては、点訳書凡例で断る必

要はありません。

点訳書凡例は、点訳書独自の工夫や留意事項がある場合に入れるもので、点訳書凡例を不必要に多用することは、避けるべきだと思います。

以前は、必要な点訳書凡例も入れていない点訳書が多かったこともあり、必要性を強調していましたが、「点訳書凡例で断ればいい」というような安易な使用は避けるよう気を付けることが大事だと思います。

24. p207 9. 点訳書凡例

翻訳本の凡例に「本書の原文ではロシア語とベラルーシ語が使用されています。日本語に翻訳するにあたり、ベラルーシ語の箇所については書体を変えてあります」とあり、一部ゴシック体の文字になってます。その部分をどのようにして点訳したらいいでしょう。また点訳書凡例で断る必要はありますか。

【A】

一般的には、点訳ではとくに区別しないで、ゴシック体を見做して書いてよいと思います。

本の内容が、ベラルーシ語とロシア語の違いを解説しているとか、ベラルーシ語を特に意識する必要がある内容の場合は、ベラルーシ語を第2カギまたは第1指示符で囲む方法もありますが、それが非常に多いと読みにくくなります。

ベラルーシ語であることが分かっても本の内容を理解するのに必要ない場合は、省略してよいと思います。

もし、ゴシック体を第2カギまたは第1指示符などで囲んだ場合は、原本の凡例の「本書の原文ではロシア語とベラルーシ語が使用されています。日本語に翻訳するにあたり、ベラルーシ語の箇所については書体を変えてあります」のあとに、点訳挿入符で、点挿テンヤクデワ■⑤③⑥メメ③⑥②デ■カコンダ。点挿 のように断ればよいと思います。

なお、ベラルーシ語を第2カギで囲んだ場合は、この原本をとおしてほかの箇所で、第2カギを用いないようにします。

ゴシック体を見做した場合は、原本の凡例のあとに、点挿テンヤクデワ■クベツ■シテ■イナイ。点挿 のように入れた方がよいと思います。

25. p207 9. 点訳書凡例

点訳書凡例は規則性がありません。どのような時につけるべきですか。

点字は墨字より読むのが大変であるから「てびき」で「できる」と書いてあるときには必要がないのかなど、規則がない部分なので迷います。

【A】

点訳書凡例は「てびき」p207～p208 (3) ①～⑬の場合に入れます。

「点訳書凡例」は目次の項目として挙げますので、その点訳書に点訳書凡例があるかどうかはすぐわかります。

ですから、必要と思った方は読みますし、必要のない方は飛ばすこともできます。読み進めていって、「あれ、これはどう読むのだろう」などと疑問に思ったときだけ点訳書凡例で確かめることができます。

点訳挿入符は、いちいちそこで強制的に読まされ、本来の文脈が分かりにくくなったりする恐れもありますが、点訳書凡例にはそれがありません。

ですから、注意としてまとめられることは点訳書凡例に書き、その場面だけに注を加える必要がある場合は点訳挿入符にするなど、上手く使い分けるのがよいと思います。

ただ、点訳書凡例としては (3) ①～⑬以外のことは、ほとんど必要がないと思います。